

青森市埋蔵文化財調査報告書 第77集

赤坂遺跡

発掘調査報告書

平成16年度

青森市教育委員会

青森市埋蔵文化財調査報告書 第77集

あ か さ か

赤坂遺跡

発掘調査報告書

平成16年度

青森市教育委員会

序

市内戸山地区においては、昭和 51 年、青森県住宅供給公社による戸山団地の造成に先立ち、関係各位の多大なるご協力のもとに、調査団により螢沢遺跡の発掘調査が実施され、縄文時代早期から弥生時代、平安時代にわたる大規模な複合遺跡であることが判明し、その成果は、本市の歴史解明において、欠くことの出来ないものとなっております。

螢沢遺跡の調査から丁度四半世紀後にあたる今年度、青森市教育委員会では同じく戸山地区に所在している赤坂遺跡について、分譲宅地開発に先立ち、遺跡の記録保存を図るため、発掘調査を実施いたしました。本書はその発掘調査の成果をまとめたものであります。

調査の結果、竪穴住居跡や土坑などの遺構を検出し、集落跡の一部を確認し本遺跡は平安時代を主体とする遺跡であることが判明しました。

本書が、今後の埋蔵文化財の保護並びに活用に役立つことができれば幸いと存じます。

最後となりましたが、調査の実施から本書の作成にわたる、関係各機関並びに各位からのご指導、地元各町会からのご協力、さらに調査委託者であります奥崎 春道氏のご理解に対しまして、厚くお礼申し上げます。

平成 17 年 3 月

青森市教育委員会

教育長 角田 詮二郎

例　　言

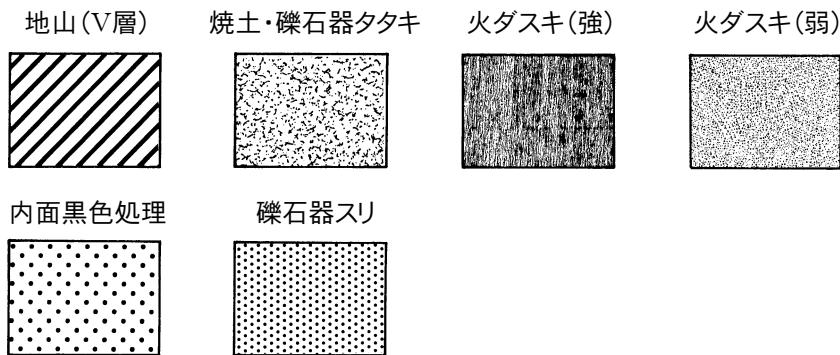
1. 本書は、分譲宅地造成に係り個人より委託を受け、平成16年度に青森市教育委員会が発掘調査を実施した青森市大字戸山字赤坂に所在する赤坂遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本遺跡の遺跡番号は、01053である。
3. 本書の執筆並びに編集は、青森市教育委員会が行った。小野貴之、児玉大成、設楽政健が担当した。執筆分担については、文末に示した。また、編集は小野が担当した。
4. 土層の注記については、「新版標準土色帳」(小山正忠、竹原秀雄 1993)に準拠した。なお、各遺構の計測値については、確認面から計測した数値である。
5. 遺構番号は、原則的に遺構の種別毎に、確認順に番号を付した。また、精査後、遺構でないと判明したものについては、欠番とした。
6. 図版番号及び表番号は、原則的に「第〇図」、「第〇表」とし、順番に通し番号を付した。
7. 挿図の縮尺は、各図毎に示した。また、写真図版の縮尺については統一を図っていない。
8. 遺構図等における方位は、磁北である。真北については、約8°東偏する。なお、第1図、第2図の方位は真北である。また、第3図、第6図の方位は、上辺が真北である。
9. 石器の石質鑑定については、青森県総合学校教育センター指導主事 工藤 一彌 氏に依頼した。
10. 発掘調査における出土遺物、実測図、写真等の関係資料は、現在、青森市教育委員会で保管している。
11. 発掘調査及び報告書の作成にあたって次の各機関・各氏からご指導・ご協力を賜った。記して感謝の意を表する(順不同・敬称略)。

青森県教育庁文化財保護課・青森県埋蔵文化財調査センター・青森県住宅供給公社・戸山市民センター・赤坂町会・杉山 敏夫・成田 誠治

凡 例

本報告書内で使用する、スクリーントーン・表現方法・略称は以下のとおりである。

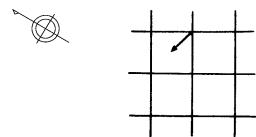
(1) 図中で使用したスクリーントーン



(2) 石器実測図の剥片石器原礫面については、ドットを用いた。

(3) グリッドの呼称

(例) C-3 グリッド



(4) 表中、写真図版中の図版番号の略称

「第○図△」 → 「○-△」

(5) 図中、表中で使用した遺構の略称

「第○号竪穴住居跡」 → 「S I -○」 「第○号土坑」 → 「S K -○」

「第○号溝状土坑」 → 「S V -○」 「第○号柱穴状ピット」 → 「P i t ○」

(6) 図中で使用したアルファベットを用いた略称

P … 土器 S … 石器 L B … ロームブロック

目 次

序

例言

凡例

目次

図版目次

表目次

写真目次

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査要項	2
第3節 調査方法	7
第4節 調査経過	8

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡	8
第2節 基本層序	11

第Ⅲ章 検出遺構と出土遺物

第1節 検出遺構

1. 竪穴住居跡	12
2. 土坑	17
3. 溝状土坑	20
4. 柱穴状ピット	20

第2節 出土遺物

1. 土器	35
2. 石器	36
3. 土製品	37
4. 石製品	37
5. 鉄関連遺物	37

観察表・計測表

まとめ

引用・参考文献

写真図版

報告書抄録

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

図版目次

第1図 調査区位置図	1
第2図 遺構確認状況(試掘調査)	1
第3図 遺跡位置図	3
第4図 グリッド配置図	4
第5図 遺構配置図	5
第6図 周辺の遺跡図	10
第7図 基本層序	11
第8図 第1号竪穴住居跡	23
第9図 第2号竪穴住居跡	24
第10図 第3号竪穴住居跡	25
第11図 第4号竪穴住居跡	26
第12図 第5号竪穴住居跡	27
第13図 第6号竪穴住居跡	29
第14図 第7号竪穴住居跡	31
第15図 土坑(1)	32
第16図 土坑(2)・溝状土坑	33
第17図 柱穴状ピット	34
第18図 遺構内出土土器(1)	39
第19図 遺構内出土土器(2)	40
第20図 遺構内出土土器(3)	41
第21図 遺構内出土土器(4)	42
第22図 遺構内出土土器(5)	43
第23図 遺構内出土土器(6)	44
第24図 遺構内出土石器	45
第25図 遺構内出土土製品・石製品 及び土師器(壺)底面拓影	46
第26図 遺構外出土土器・石器・石製品	47
第27図 遺構内・遺構外出土鉄関連遺物	48

表目次

第1表 周辺の遺跡	10
第2表 遺構内出土土器観察表(竪穴住居跡)①	49
第3表 遺構内出土土器観察表(竪穴住居跡)②	49
第4表 遺構内出土石器計測表(竪穴住居跡)	50
第5表 遺構内出土土製品観察表(竪穴住居跡)	50
第6表 遺構内出土石製品計測表(竪穴住居跡)	50
第7表 遺構内出土水晶計測表(竪穴住居跡)	50
第8表 遺構内出土鉄関連遺物計測表(竪穴住居跡)	50
第9表 遺構内出土石器計測表(土坑)	50
第10表 遺構内出土土器観察表(柱穴状ピット)	50
第11表 遺構外出土土器観察表①	51
第12表 遺構外出土土器観察表②	51
第13表 遺構外出土石器計測表	51
第14表 遺構外出土石製品観察表	51
第15表 遺構外出土鉄関連遺物計測表	51

写真目次

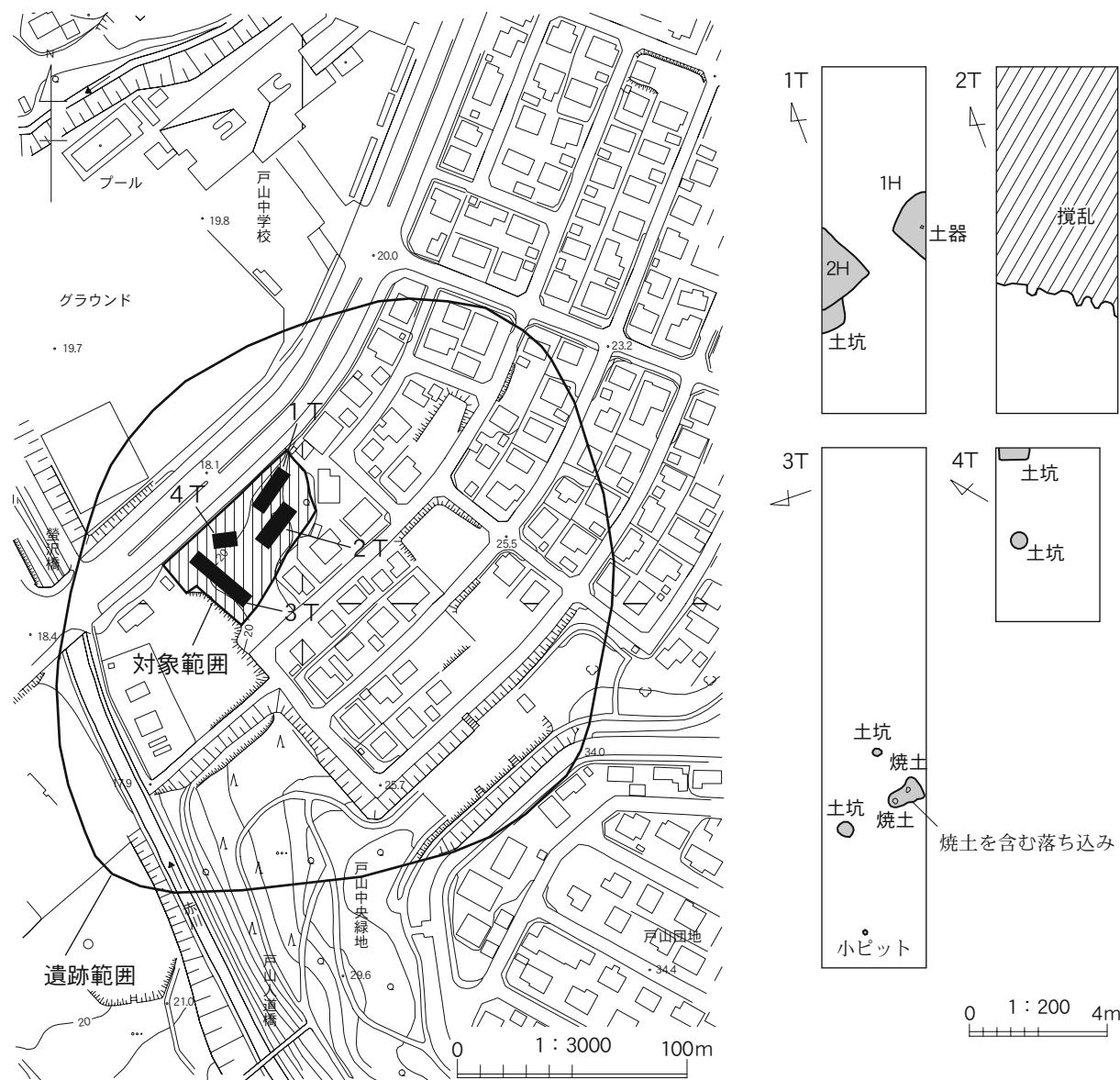
写真1 検出遺構(1)	54
写真2 検出遺構(2)	55
写真3 出土遺物(1)	56
写真4 出土遺物(2)	57
写真5 出土遺物(3)	58

第Ⅰ章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

平成15年10月27日、青森市教育委員会文化財課（以下、当委員会）に青森市戸山字赤坂地内の土地開発に係る「埋蔵文化財（遺跡）等協議書」が工事施行業者である大東建託株式会社より提出された。開発者は土地所有者（個人）である。

埋蔵文化財包蔵地の位置関係を照会した結果、開発予定地が赤坂遺跡（青森県遺跡台帳番号01053）に該当していることが明らかとなった。



第1図 調査区位置図

第2図 遺構確認状況（試掘調査）

その後、開発計画と埋蔵文化財の取扱いについて開発者側と協議し、平成15年11月26日に発掘調査の要否を目的とした試掘調査を実施した。試掘調査は、開発予定地(2,496m²)に任意にトレチを4地点設定し、重機による掘削及び必要に応じて鋤簾がけを行った。調査面積は500m²である。

試掘調査の結果、平安時代の竪穴住居跡2軒、時期不明の土坑5基などを確認したため、開発者側と協議し平成16年度に発掘調査を実施する方向となった。

平成16年4月1日に、開発者(土地所有者)より当委員会を経由して青森県教育委員会教育長宛に土木工事等のための発掘に関する届出書が提出され、4月8日付け青教文第35号で同県教育長から事前の発掘調査が必要である旨の回答がなされた。

これらを踏まえて、開発者より平成16年5月25日付けで当委員会教育長宛に発掘調査の依頼文書が提出され、5月26日付け青市教委文第68号にて受諾の旨を回答し、6月1日に発掘調査委託契約を締結した。

発掘調査は、下記の調査要項のとおり平成16年6月8日～7月16日の期間で実施することとなった。

(児玉大成)

第2節 調査要項

1. 調査目的

分譲宅地造成に係る工事に先立ち、工事予定地内に所在する埋蔵文化財包蔵地の発掘調査を実施し、遺跡の記録保存を行い、地域社会の文化財の活用に資する。

2. 遺跡名及び所在地

赤坂遺跡 (青森県遺跡番号 01053)

青森市大字戸山字赤坂481-1、482-2

3. 事業実施期間

平成16年6月1日～平成17年3月31日

4. 発掘調査期間

平成16年6月8日～平成16年7月16日

(発掘作業専用期間 平成16年6月21日～平成16年7月16日)

5. 調査面積

2,496m²

6. 調査委託者

奥崎 春道

7. 調査受託者

青森市

8. 調査担当機関

青森市教育委員会事務局文化財課

9. 調査指導機関

青森県教育庁文化財保護課

10. 予算措置

調査委託者側で措置

11. 調査体制

調査事務局 青森市教育委員会

教育長 角田 詮二郎

教育部長 古山 善猛

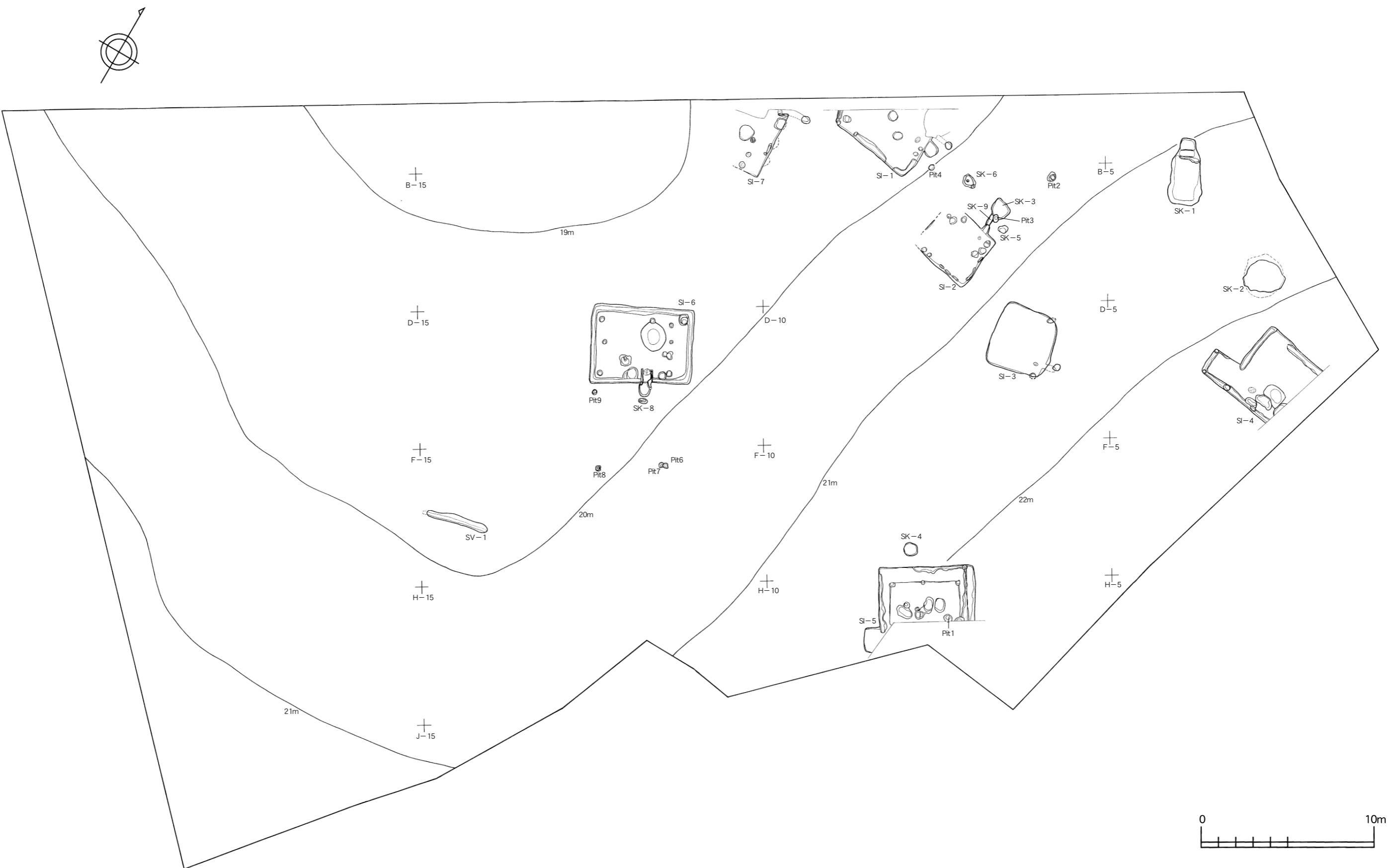
教育次長 最上 進



第3図 遺跡位置図



第4図 グリッド配置図



第5図 遺構配置図

事務局参事

文化財課長事務取扱	遠 藤 正 夫
文化財課主幹	多 田 弘 仁
主 査	辻 文 子
文化財主事	小 野 貴 之 (調査担当)
"	木 村 淳 一
"	児 玉 大 成 (調整担当)
"	設 楽 政 健 (調査担当)
主 事	宮 本 大 輔 (庶務担当)
"	足 澤 愛 子 (庶務担当)
調査補助員	小笠原 勇
"	竹 内 絵美子
"	永 洞 佐哉子

第3節 調査方法

グリッドの設定は、調査区が戸山中学校との間を走る道路に接する、調査区北西辺の端2点（調査区北端と西端に相当）を結ぶ直線を基準線（Aライン）とし、これを拡張して、調査区内に4×4mのメッシュを組んだ。なお、Aラインは磁北から58°東偏する。グリッド杭の表示は、A-3を基点とし、北東へ2、1、南西へ4、5の順に算用数字を付し、また、南東へB、Cの順にアルファベットを付した。

各グリッドの呼称は、アルファベットと算用数字を組み合わせ、東隅のグリッド杭の表示によるものとした（凡例参照）。

調査区域での測量原点（B. M）は、調査区付近に所在する青森市地盤沈下観測用水準点No.82 c（標高10.6506m）より原点移動を行い、標高22.414mの原点（B. M. 1）を設置した。これを基準として、調査区全域に対処するため適宜数箇所に設置した。

各遺構は、種類別、確認順に1番から遺構番号を付した。また、各種遺構については、竪穴住居跡をS I、土坑をS K、溝状土坑をS V、柱穴状ピットをP i tとし、略号等の呼称を用いた。

遺構精査にあたっては、原則として4分法、2分法を用いることとし、その他必要に応じ土層観察用のベルトを設定した。

遺構の実測図作成においては、平面図、断面図を主体に作成した。また、遺構内出土遺物については、必要に応じ、微細図、分布図を作成した。実測にあたっては、基本的に簡易遣り方測量で行い、縮尺については、原則として20分の1とし、その他必要に応じ10分の1とした。写真撮影については、土層断面、完掘状況を主体とし、必要に応じ、遺物出土状況を撮影した。フィルムは、モノクロームとカラーリバーサルを併用した。

出土遺物の記録は、遺構内外の遺物とともに、必要に応じ出土状況図、分布図を作成し、出土位置を記録した。図面の縮尺については、基本的に20分の1もしくは10分の1とした。その他必要に応じ写真撮影を行った。

第4節 調査経過

- 6月8日（火）調査区内における堆積層の記録を取り始めた。また、重機による調査区域内の表土剥ぎを開始した。以降、表土剥ぎ及び調査区外への排土の搬出作業と併行し、6月中旬まで、原点移動、調査基準杭打設等の作業を行った。排土搬出については、搬出先が主に五所川原市ということもあり、時間を要した。
- 6月21日（月）発掘作業員の任用開始日であり、調査開始式を行った。また、調査区近辺にプレハブを設置し、機材運搬や環境整備を行った。
- 6月22日（火）機材整理等の環境整備と併行し、調査区北西側から鋤簾がけによる遺構確認作業を開始した。昨年度の試掘調査で確認済みであった第2号、第3号竪穴住居跡を含む竪穴住居跡6軒、土坑6基等を確認した。遺構確認を続けた。
- 6月23日（水）確認した遺構について順次精査を開始した。
- 7月1日（木）調査区の入口付近で第7号竪穴住居跡を確認し、精査を開始した。また、新たに確認した遺構についても、順次精査を行った。
- 7月2日（金）青森県の文化財パトロール員である成田誠治氏が来跡し、調査区周辺の状況についてご教示頂いた。
- 7月12日（月）調査区の真向かいに所在する市立戸山中学校の1年生約150名が14日まで数回に分けて発掘調査の見学に訪れた。住居跡床面や遺物等に実際に触れてみるという行為は、生徒の興味を引き出しているような印象を受けた。
- 7月15日（木）作図や写真撮影等の作業を終了した。
- 7月16日（金）機材の整理や運搬を行った。調査終了式を行い、現地調査を終了した。

第Ⅱ章 遺跡の環境

第1節 遺跡の位置と周辺の遺跡

青森市は、東西約10km、南北約5kmに広がる三角形状の青森平野を中心とし、その北側には青森湾が広がっている。この平野は、東側で東岳を中心とする山地、南東～南側で火山性台地、西側で緩やかな丘陵と、三方を山地及び丘陵に取り囲まれている。

東側の山地は、奥羽山脈の延長部に相当し、夏泊半島の山地へと続いている。比較的急峻な山地であり、新生代新第三期（約2,500万年前～約170万年前）の火山岩、堆積岩など市内でも比較的古い地質の見られる地点となっている。

南東～南側は、「田代平溶結凝灰岩」といわれる八甲田火碎流堆積物で構成される緩傾斜の丘陵で、侵食に弱いことから荒川、横内川、駒込川等の市内を北流する複数の河川によって分けられ、市内に向かって突き出す舌状の台地となっている。

西側は、大糸迦丘陵から続く岡町層、鶴ヶ坂層を基盤とした緩やかな丘陵で平野部並びに南側の火山性台地とは市内を南北に走る「入内断層」によって区切られている。

本遺跡は、青森市戸山字赤坂に所在し、南～南東部の火山性台地上に位置する。本遺跡の位置する台地は西側を北流する赤川によって西側の台地と区切られており、火山性台地の東端に相当する。この火山性台地のすぐ東側、本遺跡から約500mの地点は、砥取山等東部の山地となっており、この山地は、砥取山から北側小山地末端の稻山へと伸びている。

調査対象区は本遺跡範囲の北側にあたる。調査区の北側には、戸山中学校が所在しているが、本遺跡北端はそのグラウンド隅までとなっている。調査対象区域内は、南東方向から北西方向に傾斜し緩やかに下る斜面となっており、標高は、18m～22mである。調査前には畑地として利用されていた。

青森市内では平成17年2月28日現在、306個所の埋蔵文化財包蔵地が存在しており、本遺跡の周囲にも複数の遺跡が所在している。本遺跡及び比較的近辺に所在する周知の遺跡を図示した（第6図）。

本遺跡の北側には、同じく赤川右岸の火山性台地上に位置する戸山遺跡が所在している。縄文、平安時代の散布地である。赤川を挟んで本遺跡の南側には、戸山団地造成に先立つ発掘調査が実施された螢沢遺跡が所在している。調査の結果、縄文時代早期～晩期、弥生時代、平安時代にわたる複合遺跡であることが判明した。縄文時代早期では、土坑が検出され、主体となる土器は、螢沢AⅡ式として型式設定されている。前期では若干の遺物の出土に留まるが、中期、後期では、住居跡やフラスコ状土坑等を検出し、集落跡が確認されている。また、晩期では墓と思われる土坑が、弥生時代では甕形土器の埋設された土坑1基がそれぞれ検出されている。平安時代では、62軒の住居跡や掘立柱建物跡等による集落跡が確認されている。

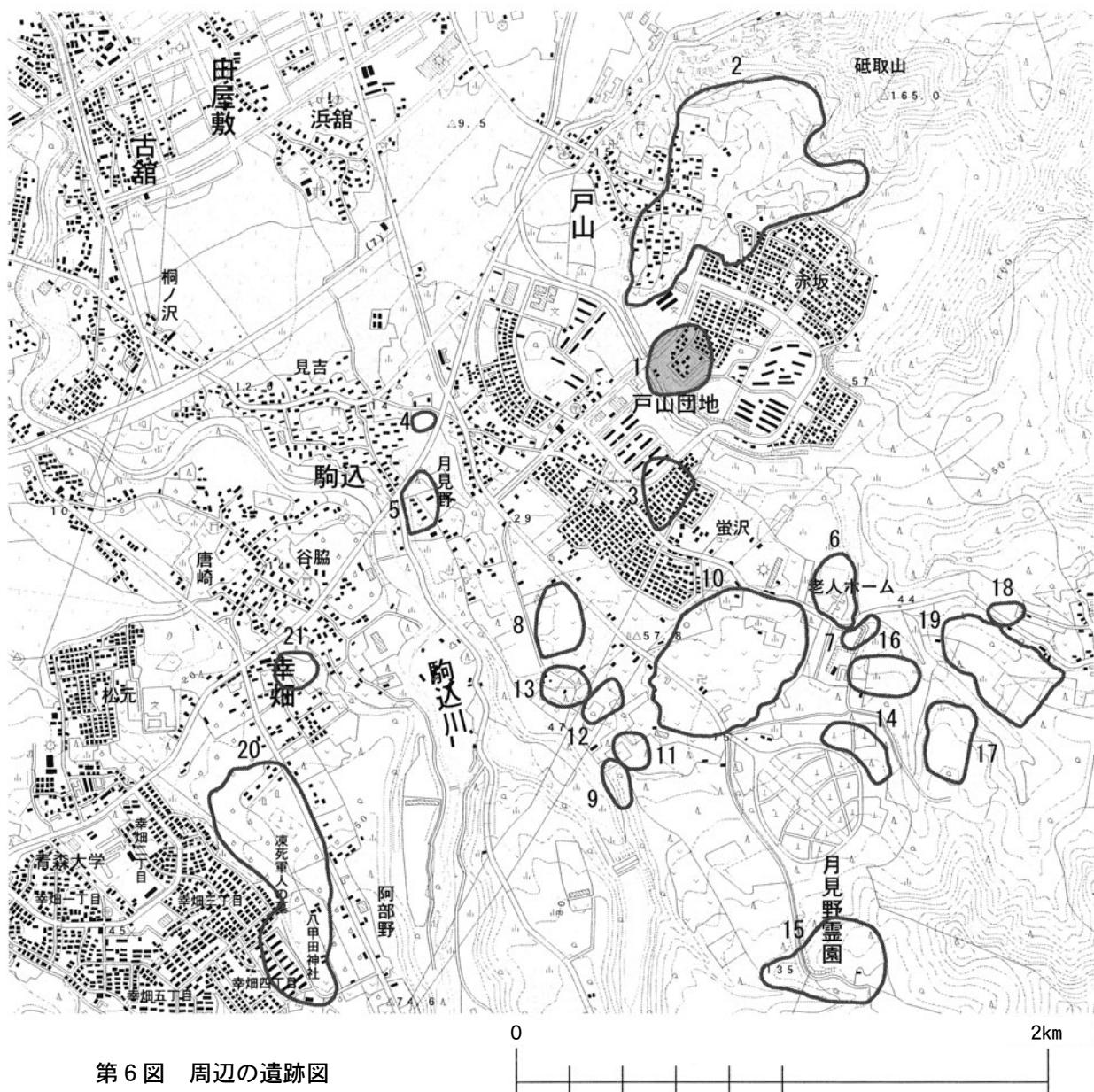
螢沢遺跡の西側、駒込川付近には、平安時代の散布地である見吉遺跡と城館跡である駒込館遺跡が所在する。駒込館遺跡については、平成14年度に当委員会で試掘調査を実施しており、平安時代の竪穴住居跡3軒等を確認したほか、縄文土器と土師器が出土している。

赤川と駒込川に挟まれる台地上には、これらの遺跡の山の手側に多数の遺跡が所在している。月見野(1)～(5)遺跡、玉清水(1)～(3)遺跡、沢山(1)～(3)遺跡、沢山平野(1)、(2)遺跡等である。

月見野(1)遺跡では、工事中発見された縄文時代後期の甕棺について、葛西励氏により調査が行われ、甕棺内部から人骨が検出されている。月見野(2)～(5)遺跡は、主に縄文時代、平安時代の散布地である。

玉清水(1)遺跡は、昭和40、41年に当委員会が発掘調査を実施しており、縄文時代晩期大洞B～C1式期を中心とした遺物を確認している。また、昭和59年には、桜井清彦氏らにより縄文時代晩期の立石を伴う配石遺構やその下部で確認された土坑墓群が調査されている。玉清水(3)遺跡は、昭和44、45年に当委員会が発掘調査を実施しており、縄文時代前期後半の竪穴住居跡4軒が確認されている。沢山(1)遺跡では、葛西励氏らにより発掘調査が実施されており、縄文時代晩期後葉～終末の包含層が確認されている。

駒込川西側の台地上には、阿部野(1)遺跡と阿部野(2)遺跡が所在している。阿部野(1)遺跡については、平成14年度に当委員会で試掘調査を実施しており、平安時代の竪穴住居跡2軒を確認したほか、縄文土器や土師器を確認している。阿部野(2)遺跡は、平安時代の散布地である。



番号	遺跡番号	遺 跡 名	所 在 地	種 別	時 代	文 献
1	053	赤坂遺跡	戸山字赤坂	集落跡	縄文、平安	青森市教育委員会2004、2005
2	005	戸山遺跡	戸山字赤坂	散布地	縄文、平安	
3	057	螢沢遺跡	駒込字見野	集落跡	縄文(早・前・後)、弥生、平安	青森市螢沢遺跡発掘調査団1979
4	295	見吉遺跡	駒込字螢沢	散布地	平安	
5	048	駒込館遺跡	駒込字桐ノ沢	城館跡	平安	青森市教育委員会2003
6	010	月見野(1)遺跡	駒込字螢沢	散布地	縄文	葛西1978
7	192	月見野(2)遺跡	駒込字螢沢	散布地	—	
8	221	月見野(3)遺跡	駒込字月見野	散布地	縄文(後)、平安	
9	235	月見野(4)遺跡	駒込字月見野	散布地	縄文(後)	
10	264	月見野(5)遺跡	駒込字月見野	散布地	縄文	
11	006	玉清水(1)遺跡	駒込字月見野	散布地	縄文(晚)	青森市教育委員会1967、桜井ほか1985
12	007	玉清水(2)遺跡	駒込字月見野	散布地	—	
13	008	玉清水(3)遺跡	駒込字月見野	散布地	縄文(前)	青森市教育委員会1971
14	009	月見野靈園遺跡	駒込字月見野	散布地	平安	
15	286	月見野(6)遺跡	駒込字深沢	散布地	縄文	
16	042	沢山(1)遺跡	沢山字平野	散布地	縄文(晚)	葛西ほか1994
17	044	沢山(3)遺跡	沢山字平野	散布地	平安	
18	288	沢山平野(1)遺跡	沢山字平野	散布地	縄文(前・中・晚)	
19	289	沢山平野(2)遺跡	沢山字平野	散布地	縄文(前・中・晚)、平安	
20	050	阿部野(1)遺跡	幸畠字阿部野	集落跡	縄文、平安	青森市教育委員会2003
21	219	阿部野(2)遺跡	幸畠字阿部野	散布地	平安	

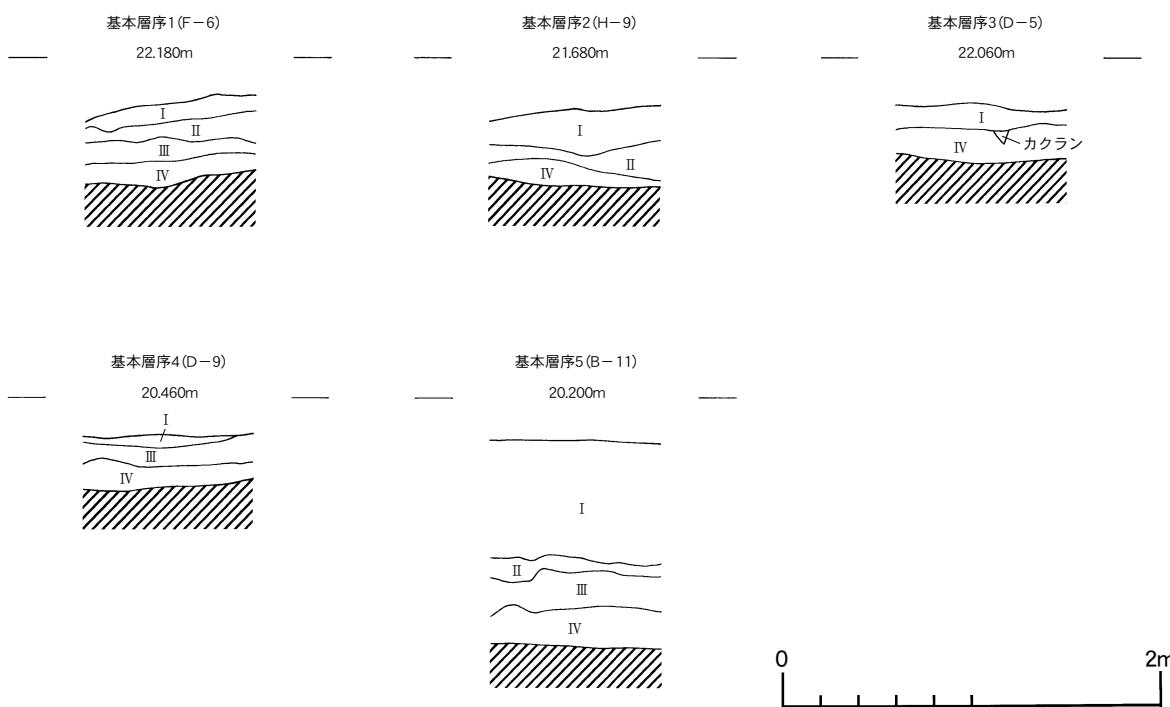
第1表 周辺の遺跡

第2節 基本層序

調査区域の基本層序は、以下のとおりである。

- 第Ⅰ層 黒褐色土（主に 10YR3 / 1）表土である。削平後の盛土を一括する。
- 第Ⅱ層 黒褐色土（主に 10YR2 / 2）平安時代の遺物を包含する。
- 第Ⅲ層 黒褐色土（主に 10YR3 / 2）縄文時代の遺物を包含する。
- 第Ⅳ層 漸移層
- 第Ⅴ層 地山として一括した。上位には、黄褐色浮石質火山灰が堆積する。月見野火山灰に相当する。
下位には、赤褐色粘土質火山灰が堆積する。大谷火山灰に相当する。

調査区内には部分的に盛土や削平が認められた。特に調査区の北東～東側については、第Ⅴ層まで削平された後、盛土がされており、盛土除去後に住居跡等の遺構を確認した。なお、平安時代の降下火山灰は、調査時には確認していない。調査区外の北東～南側にかけては主として住宅地であるが、調査区の状況を見る限り、第Ⅴ層まで削平後、盛土がなされその上に住宅が造られているため、調査区周囲にも住居跡等の遺構は残っているものと思われる。



第7図 基本層序

第Ⅲ章 検出遺構と出土遺物

第1節 検出遺構

1. 竪穴住居跡

第1号竪穴住居跡（第8図）

[位置・確認層] B・C-7、8グリッドに位置する。第V層において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 調査区端に位置し削平を受けていたため、全容は不明であるが、残存部より平面形は、おおむね方形を呈するものと思われる。規模は、536cm×(404)cmである。深さは、東壁が36cm、西壁が30cm、南壁が39cmである。

[壁] 残存する壁は外側へ直線的に立ち上がる。

[床] 大谷火山灰に相当する第V層を床面としている。南側から北側へ若干の傾斜が見られ、また、若干の起伏も見られるがほぼ平坦である。硬く締まる。

[壁溝] 東壁、南壁、西壁で断続的に巡っている。幅21～43cm、深さ9～14cmである。

[ピット・柱穴] 7基検出した。規模はピット1が24×21×18cm、ピット2が28×19×18cm、ピット3が26×22×24cm、ピット4が45×39×20cm、ピット5が54×52×11cm、ピット6が53×45×14cm、ピット7が29×20×32cmである。主柱穴はピット1、2について位置的に可能性も考えられるが、掘り込みが浅く判然としない。

[カマド] 東壁で2基検出した。南側をカマド1、北側をカマド2とする。東壁は、調査区端に位置し、また搅乱を受けているため、東壁における各カマドの設置位置は不明である。カマド1は、火床面と煙道部を確認した。袖部は残存していない。主軸は、N-98°-Eである。火床面は楕円形を呈し、36cm×28cmを計る。煙道部は、半地下式と思われ、幅62～77cm、長さ75cmを計る。天井部は崩落しており、カマド1堆積土第1～3層、第7層がこれに相当する。第V層下位の大谷火山灰出自と思われる。煙道底面は、火床面奥から壁際にかけて若干立ち上がり、その後煙出部へ向かってわずかに下る。カマド2は、煙道部のみを検出した。主軸は、N-100°-Eである。地下式と思われ、煙出孔は壁から110cmの地点にあり、楕円形を呈し、42cm×36cmを計る。煙道底部は、煙出孔に向かって徐々に立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[覆土] 4層に分層した。黒褐色土、暗褐色土が堆積し、ロームを少量含む。自然堆積と思われる。

[出土遺物] 覆土、カマド覆土より須恵器(壺)(第18図1)、土師器(壺)(第18図2)、土師器(甕)(第18図3～6)、不定形石器(第24図1)、敲磨器(第24図3)、刀子(第27図13)が出土している。また、覆土より水晶(単晶・非製品)(第25図4)が出土している。

[時期] 出土遺物よりおおむね10世紀中葉～後半と思われる。

第2号竪穴住居跡（第9図）

[位置・確認層] C・D-6、7グリッドに位置する。第V層において確認した。

[重複] 第9号土坑と重複し、本遺構が新しい。

[平面形・規模] 西壁等部分的な確認に留まるため全容は不明であるが、おおむね平面形は方形を呈するものと思われる。規模は、363cm×337cmである。深さは、東壁が22cm、西壁が4cm、南壁が11cm、北壁が4cmである。

[壁] 残存する壁は外側へ直線的に立ち上がる。

[床] おおむね月見野火山灰に相当する第V層を床面としている。また、西側一部では、第V層まで掘り込んだ後、褐色土を埋めて貼床としている。東側から西側へ若干の傾斜が見られる。また、起伏が見られる。中央部は比較的硬く締まっているが、壁側に向かって序々に締まりがなくなる。

[壁溝] 東壁、南壁で断続的に巡っている。幅4～13cm、深さ2～4cmである。

[ピット・柱穴] 8基検出した。規模はピット1が42×33×13cm、ピット2が42×37×14cm、ピット3が45×42×14cm、ピット4が23×22×16cm、ピット5が27×23×13cm、ピット6が23×17×8cm、ピット7が49×37×11cm、ピット8が34×31×19cmである。主柱穴はいずれのピットも掘り込みが浅く判然としない。

[カマド] 北壁で確認した。北壁の東端から2/4の地点に設置されている。火床面と煙道部を確認した。袖部は残存していない。主軸はN-2°-Eである。火床面はほぼ円形を呈し、径16cmを計る。

煙道部は半地下式と思われ、幅22～40cm、長さ50cmを計る。天井部は崩落したと思われ、カマド堆積土第1層がこれに相当する。第V層下位の大谷火山灰出自と思われる。煙道底面は、火床面奥から壁際で立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[覆土] 4層に分層した。主として暗褐色土、黒褐色土が堆積し、ロームを少量含む。自然堆積と思われる。

[出土遺物] 覆土、カマド覆土より土師器(壺)(第18図7)、土師器(甕)(第18図10)、敲磨器(第24図4)、鍬先(第27図11)、ピット3覆土より土師器(壺)(第18図8)、土師器(甕)(第18図9、11)、が出土している。なお、ピット3覆土より出土した土師器(壺)(第18図8)には、第5号竪穴住居跡ピット7覆土出土のものとの接合関係が見られた。

[時期] 出土遺物よりおおむね10世紀中葉～後半と思われる。

第3号竪穴住居跡（第10図）

[位置・確認層] E・F-5、6グリッドに位置する。第V層において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は隅丸方形を呈する。規模は378cm×368cmである。深さは、東壁が57cm、西壁が34cm、南壁が47cm、北壁が33cmである。

[壁] 全体としてやや外側へ直線的に立ち上がる。北壁と南壁の一部はやや内側へ立ち上がる。

[床] 大谷火山灰に相当する第V層を床面としている。西側から東側へ若干の傾斜が見られるがほぼ平坦である。硬く締まる。

[壁溝] なし。

[ピット・柱穴] 2基検出した。規模は、ピット1が37×35×6cm、ピット2が47×26×11cmである。主柱穴は掘り込みが深いがピット1、2が考えられる。

[カマド] 東壁で確認した。東壁の南端から 1/4 の地点に設置されている。火床面、袖部、煙道部を確認した。主軸は N - 70° - E である。火床面は不整橢円形を呈し、26 cm × 19 cm を計る。袖部は、右袖で、礫 2 点を確認した。芯材として用いられた可能性が考えられる。煙道部は地下式で、煙出孔は壁から 60 cm の地点にあり、不整橢円形を呈し、43 cm × 41 cm を計る。煙出孔を塞ぐような状況で甕(第 19 図 3)の破片が礫と共に出土している。煙道底面は、火床面奥から壁際で立ち上がり、その後一旦下った後、煙出孔に向かい立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[覆土] 8 層に分層した。黒色土～暗褐色土が堆積し、3～6 層は全体としてロームを多量含む。人為堆積と思われる。

[出土遺物] 覆土、カマド覆土より須恵器(甕)(第 19 図 1)、土師器(壺)(第 19 図 2)、土師器(甕)(第 19 図 3～7)、敲磨器(第 24 図 6)、砥石(第 24 図 5)、石皿(第 24 図 7)、焼成粘土塊(第 25 図 1)が出土している。

[時期] 出土遺物よりおおむね 10 世紀中葉～後半と思われる。

第 4 号竪穴住居跡(第 11 図)

[位置・確認層] E・F-1～3 グリッドに位置する。第 V 層において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 調査区端に位置するため全容は不明である。方形基調で張り出し部を有する形態と思われる。残存部の規模は、508 cm × 450 cm である。深さは、東壁が 27 cm、西壁が 43 cm、南壁が 23 cm である。

[壁] 残存部は外側へ直線的に立ち上がる。

[床] 月見野火山灰及び大谷火山灰に相当する第 V 層を床面としている。東側から西側へ若干の傾斜が見られる。また、起伏が見られる。硬く締まる。

[壁溝] 残存部では、断続的に巡っている。幅 16～41 cm、深さ 5～30 cm である。

[ピット・柱穴] 8 基検出した。ピット 1 が 99 × 不明 × 24 cm、ピット 2 が 128 × 82 × 18 cm、ピット 3 が 111 × 58 × 12 cm、ピット 4 が 80 × 40 × 18 cm、ピット 5 が 22 × 20 × 49 cm、ピット 6 が 25 × 22 × 50 cm、ピット 7 が 40 × 30 × 30 cm、ピット 8 が 37 × 23 × 21 cm である。主柱穴は判然としない。なお、ピット 5、6 は柱穴の可能性が考えられる。

[カマド] 確認していない。南壁付近でほぼ円形で径 40 cm の火床面を確認しており、本遺構が強く削平を受けていることから、カマド残存部としての可能性もあるが、カマドを有する場合、調査区外に存在するものと考えられる。

[その他の付属施設] 西壁南側に張り出し部を有する。収蔵施設等の可能性が考えられる。

[覆土] 6 層に分層した。主として暗褐色土、黒褐色土が堆積し、ロームを少量含む。自然堆積と思われる。

[出土遺物] 覆土、カマド覆土より須恵器(甕)(第 20 図 1)、土師器(壺)(第 20 図 2～4)、土師器(甕)(第 20 図 6、8、9)、支脚(第 25 図 2、3)、ピット 1 覆土より不定形石器(第 24 図 2)、カマド底面より、土師器(壺)(第 20 図 5)、貼床より土師器(甕)(第 20 図 7)が出土している。なお、第 2 層より出土した土師器(壺)(第 20 図 2)は、第 5 号竪穴住居跡床面より出土したものとの接合関係が見られた。

[時期] 出土遺物よりおおむね 10世紀中葉～後半と思われる。

第5号竪穴住居跡（第12図）

[位置・確認層] H・I-6～8グリッドに位置する。第V層において確認した。

[重複] 第1号柱穴状ピットと重複し、本遺構が古い。

[平面形・規模] 調査区端に位置し、全容は不明であるが、方形を呈するものと思われる。残存部の規模は、562cm×(312)cmである。深さは、東壁が80cm、西壁が32cm、南壁が62cmである。

[壁] 全体としてやや外側へ直線的に立ち上がる。東壁側は若干緩やかに立ち上がる。

[床] 大谷火山灰に相当する第V層を床面としている。東側から西側へ若干の傾斜が見られる。床面中央部が段状に落ち込む様に見られたが、調査区端に向かい不明瞭となり、断面では確認できなかった。拡張の可能性も考えられる。中央部は硬く締まっているが、外側は若干締まりが弱くなる。

[壁溝] 残存部では北西壁の一部を除き巡っている。幅9～45cm、深さ4～17cmである。

[ピット・柱穴] 10基検出した。ピット1が78×61×16cm、ピット2が50×34×34cm、ピット3が28×20×14cm、ピット4が102×62×25cm、ピット5が97×52×24cm、ピット6が36×31×15cm、ピット7が58×不明×14cm、ピット8が35×29×18cm、ピット9が24×24×21cm、ピット10が31×21×10cm、ピット11が24×18×16cmである。ピット7～10は掘り込みが浅いが、柱穴としての可能性が考えられる。

[カマド] 確認していない。カマドを有する場合、調査区外に存在するものと考えられる。

[その他の付属施設] 南西壁に張り出し部を有する。出入り口部としての可能性も考えられるが判然としない。

[覆土] 10層に分層した。主として暗褐色土、黒褐色土が堆積し、ロームを少量含む。自然堆積と思われる。

[出土遺物] 覆土より須恵器(甕)(第20図11)、須恵器(壺)(第20図10、12、13)、土師器(壺)(第20図14～16)、敲磨器(第24図8)、ピット7覆土より土師器(壺)(第18図8)、ピット4覆土より土師器(甕)(第20図17)、床面より土師器(壺)(第20図2)が出土している。なお、床面より出土した土師器(壺)(第20図2)は、第4号竪穴住居跡第2層より出土したものとの接合関係が、ピット7覆土より出土した土師器(壺)(第18図8)は、第2号竪穴住居跡ピット3覆土より出土したものとの接合関係が、また、第1層より出土した土師器(壺)(第20図15)は、ピット4覆土より出土したものとの接合関係が見られた。

[時期] 出土遺物よりおおむね 10世紀中葉～後半と思われる。

第6号竪穴住居跡（第13図）

[位置・確認層] D・F-10～12グリッドに位置する。第V層において確認した。

[重複] 第7号土坑と重複し、本遺構が新しい。

[平面形・規模] 平面形は長方形を呈する。規模は、598cm×454cmである。深さは、東壁が71cm、西壁が32cm、南壁が57cm、北壁が30cmである。

[壁] 外側へ直線的に立ち上がる。

[床] 大谷火山灰に相当する第V層まで掘り込んだ後、ロームブロックを多量含む黒褐色土を埋めて貼床としている。第7号土坑と重複する付近は落ち込むが、全体としてほぼ平坦である。硬く締まる。

[壁溝] 全周する。幅 20 ~ 57 cm、深さ 8 ~ 30 cm である。

[ピット・柱穴] 14 基検出した。ピット 1 が $33 \times 31 \times 7$ cm、ピット 2 が $26 \times 23 \times 19$ cm、ピット 3 が $30 \times 30 \times 26$ cm、ピット 4 が $32 \times 30 \times 12$ cm、ピット 5 が $29 \times 24 \times 31$ cm、ピット 6 が $43 \times 37 \times 46$ cm、ピット 7 が $63 \times 55 \times 15$ cm、ピット 8 が $38 \times 35 \times 6$ cm、ピット 9 が $51 \times 47 \times 24$ cm、ピット 10 が $23 \times 22 \times 16$ cm、ピット 11 が $33 \times 32 \times 7$ cm、ピット 12 が $46 \times 34 \times 10$ cm、ピット 13 が $74 \times 74 \times 17$ cm、ピット 14 が $94 \times 66 \times 23$ cm である。主柱穴は判然としないが、ピット 2、3、5、6、14 は、柱穴の可能性も考えられる。

[カマド] 南壁で確認した。南壁の西端から 3/4 の地点に設置されている。火床面、袖部、煙道部を確認した。主軸は N - 154° - E である。火床面は不整橢円形を呈し、47 cm × 40 cm を計る。袖部は、左右の袖を確認した。ロームにより構築されており、第 V 層下位の大谷火山灰出自と思われる。煙道部は半地下式と思われ、幅 41 ~ 68 cm、長さ 82 cm を計る。天井部は崩落したと思われ、カマド堆積土第 3 層、第 4 層がこれに相当する。袖部と同様、第 V 層下位の大谷火山灰出自と思われる。煙道底面は、火床面奥から緩やかに立ち上がり、壁際で一旦強く立ち上がり、その後また緩やかに立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[覆土] 9 層に分層した。主として黒色土が堆積し、ロームを少量含む。自然堆積と思われる。

[出土遺物] 覆土、カマド覆土より須恵器(壺)(第 21 図 2 ~ 4)、土師器(壺)(第 21 図 7、8)、土師器(甕)(第 21 図 10 ~ 14、第 22 図 1 ~ 3、6、8)、擦文土器(第 22 図 8)、縄文土器(第 22 図 9)、ピット 14 覆土より須恵器(甕)(第 21 図 5)、ピット 6 覆土より土師器(壺)(第 21 図 9)、ピット 1 覆土より土師器(甕)(第 22 図 4)、ピット 3 覆土より土師器(甕)(第 22 図 5)、ピット 14 覆土より土師器(甕)(第 22 図 7)、鍬先(第 27 図 10)、床面より須恵器(壺)(第 21 図 1)、土師器(壺)(第 21 図 6)、椀型鍛冶滓(第 27 図 2)が出土している。

[時期] 出土遺物よりおおむね 10 世紀中葉～後半と思われる。

第 7 号竪穴住居跡 (第 14 図)

[位置・確認層] B・C - 9、10 グリッドに位置する。第 V 層において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 調査区端に位置し削平を受けているため全容は不明であるが、方形を基調とする形態と思われる。残存部の規模は、415 cm × (276) cm である。深さは、東壁が 56 cm、南壁が 34 cm である。

[壁] 残存部はやや外側へ直線的に立ち上がる。

[床] 大谷火山灰に相当する第 V 層を床面としている。部分的に削平を受けているため、判然としないが、残存部はほぼ平坦である。

[壁溝] なし。

[ピット・柱穴] 6 基検出した。ピット 1 が $70 \times 58 \times 22$ cm、ピット 2 が $19 \times 16 \times 30$ cm、ピット 3 が $34 \times 32 \times 19$ cm、ピット 4 が $28 \times 26 \times 11$ cm、ピット 5 が $90 \times 87 \times 13$ cm、ピット 6 が $29 \times 29 \times 19$ cm である。ピット 2、3 は柱穴の可能性が考えられる。

[カマド] 東壁で確認した。東壁は、調査区端に位置し、また搅乱を受けているため、東壁におけるカマドの設置位置は不明である。火床面、袖部、煙道部を確認した。主軸は N - 88° - E である。火床面は搅乱を受けしており、残存部は 28 cm を計る。袖部は、右袖を確認した。左袖側は搅乱を受けている。

煙道部は地下式で、煙出孔は壁から 100 cm の地点にあり、不整橈円形を呈し、47 cm × 42 cm を計る。煙道底面は、火床面奥側から壁際奥までほぼ平坦で、その後一旦緩やかに立ち上がる。再度平坦となつた後、煙出孔に向かい立ち上がる。

[その他の付属施設] なし。

[覆土] 3 層に分層した。黒褐色土が堆積し、ロームを少量含む。自然堆積と思われる。

[出土遺物] 覆土、カマド覆土より土師器(坏)(第23図3)、土師器(甕)(第23図4～7)、縄文土器(第23図8)、砥石(第24図10)、石皿(第24図9)、石製品(第25図5)、鍛冶滓(第27図5)、羽口(第27図7、8)、ピット1覆土より土師器(坏)(第23図2)、土師器(甕)(第23図5)、羽口(第27図6)、ピット4覆土より炉壁(第27図1)、ピット5覆土より砥石(第24図11)、ピット6覆土より椀型鍛冶滓(第27図4)、羽口(第27図9)、床面より土師器(坏)(第23図1)、土師器(甕)(第23図7)が出土している。

[時期] 出土遺物よりおおむね 10 世紀中葉～後半と思われる。

2. 土坑

第1号土坑（第15図）

[位置・確認層] B-3、C-2、3 グリッドに位置する。第V層において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は不整な長方形で、北西側は、階段状施設部分が方形に突出している。開口部は、長軸幅 389 cm、短軸幅 201 cm、底面は、長軸幅 255 cm、短軸幅 140 cm、深さ 92 cm である。

[壁] 全体として、やや外側へ直線的に立ち上がる。北東壁と南西壁の南側は一部屈曲して立ち上がる。北西側施設部分は階段状に立ち上がる。

[底面] 全体として北東側から南西側へ若干の傾斜が見られるが、ほぼ平坦である。

[覆土] 9 層に分層した。第1～6 層は、全体的にしまりがなく、重機等による削平後の盛土の可能性が高いと思われた。本来の覆土は、第7 層以下で自然堆積と思われる。

[出土遺物] なし。

[時期] 不明である。

第2号土坑（第15図）

[位置・確認層] C・D-2 グリッドに位置する。第V層において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は不整な橈円形で、開口部は 242 cm × 184 cm、底面は 255 cm × 237 cm、深さは 100 cm である。

[壁] 全体としてオーバーハングし、フラスコ状ないし袋状を呈する。一部外側へ立ち上がるが部分的な崩落と考えられる。

[底面] ほぼ平坦である。

[覆土] 17 層に分層した。覆土下層は人為堆積、上層は自然堆積と思われる。

[出土遺物] 覆土より敲磨器が 2 点（第24図12、13）出土している。

[時期] 出土遺物より、縄文時代の土坑と思われる。

第3号土坑（第15図）

[位置・確認層] C-6 グリッドに位置する。第V層において確認した。

[重複] 第9号土坑、第3号柱穴状ピットと重複し、本遺構は、第3号柱穴状ピットより古く、第9号土坑より新しい。

[平面形・規模] 平面形は不整な橢円形で、開口部は 122 cm × 104 cm、底面は、112 cm × 92 cm、深さは 12 cm である。

[壁] 全体として外側へ緩やかに立ち上がる。

[底面] 全体として東側から西側へ傾斜が見られる。また、若干の起伏が見られる。

[覆土] 黒褐色土が堆積し、ロームブロックを中量含む。人為堆積と思われる。

[出土遺物] なし。

[時期] 不明である。

第4号土坑（第15図）

[位置・確認層] H-7、8 グリッドに位置する。第V層において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は不整な円形で、開口部は 82 cm、底面は 71 cm、深さは 26 cm である。

[壁] 全体としてやや外側へ直線的に立ち上がる。北東壁は一部オーバーハングして立ち上がる。

[底面] 若干の起伏が見られるがほぼ平坦である。

[覆土] 黒褐色土が堆積し、ローム粒を少量含む。自然堆積と思われる。

[出土遺物] なし。

[時期] 不明である。

第5号土坑（第15図）

[位置・確認層] C・D-6 グリッドに位置する。第V層において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は不整な橢円形で、開口部は 58 cm × 47 cm、底面は 37 cm × 29 cm、深さは 34 cm である。

[壁] 外側へ直線的に立ち上がる。

[底面] 中央部に向かう傾斜が見られる。

[覆土] 黒褐色土が堆積し、ローム粒、ロームブロックを微量含む。自然堆積と思われる。

[出土遺物] なし。

[時期] 不明である。

第6号土坑（第16図）

[位置・確認層] C-6、7 グリッドに位置する。第V層において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は不整な橢円形で、開口部は 90 cm × 72 cm、底面は 68 cm × 50 cm、深さは 15 cm である。

[壁] 全体として外側へ緩やかに立ち上がる。北壁は一部やや外側へ直線的に立ち上がる。

[底面] 東側から西側へ若干の傾斜が見られる。底面中央部やや西寄りと東壁際に各 1 基の底面ピットを有する。

[覆土] 底面ピット覆土を含め 2 層に分層した。黒褐色土、暗褐色土が堆積し、ローム粒、ロームブロックを少量含む。自然堆積と思われる。

[出土遺物] なし。

[時期] 不明である。

第 7 号土坑（第 16 図）

[位置・確認層] E – 11 グリッドに位置する。第 V 層において確認した。

[重複] 第 7 号竪穴住居跡と重複し、本遺構が古い。

[平面形・規模] 平面形は不整な橢円形で、開口部は 173 cm × 144 cm、底面は 86 cm × 70 cm、深さは 68 cm である。

[壁] 外側へ緩やかに立ち上がる。

[底面] 南側から北側へ若干の傾斜が見られる。

[覆土] 4 層に分層した。黒色土、黒褐色土が主体で全体的にロームブロックを多量ないし中量含む。人為堆積と思われる。

[出土遺物] なし。

[時期] 遺構間の重複関係より平安時代以前の土坑と思われる。

第 8 号土坑（第 16 図）

[位置・確認層] F – 11 グリッドに位置する。第 III 層において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は不整な橢円形で、開口部は 50 cm × 26 cm、底面は 35 cm × 13 cm、深さは 18 cm である。

[壁] 外側へ緩やかに立ち上がる。

[底面] 西側から東側へ若干の傾斜が見られる。南西壁際に底面ピットを有する。

[覆土] 2 層に分層した。黒色土、黒褐色土が堆積し、ローム粒を少量含む。自然堆積と思われる。

[出土遺物] なし。

[時期] 不明である。

第 9 号土坑（第 16 図）

[位置・確認層] C – 6 グリッドに位置する。第 V 層において確認した。

[重複] 第 2 号竪穴住居跡、第 3 号土坑、第 3 号柱穴状ピットと重複し、本遺構が古い。

[平面形・規模] 平面形は重複により不明である。残存部最長は 66 cm、短軸幅は 25 cm、深さは 11 cm である。

[壁] 外側へ緩やかに立ち上がる。

[底面] 南側から北側へ若干の傾斜が見られる。

[覆土] 黒褐色土が堆積し、ローム粒を微量含む。自然堆積と思われる。

[出土遺物] なし。

[時期] 遺構間の重複関係より、平安時代以前と思われる。

3. 溝状土坑

第1号溝状土坑（第16図）

[位置・確認層] G・H-14グリッドに位置する。第V層において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は、おむね東西に細長い形状を呈する。開口部は363cm×55cm、底面は384cm×18cm、深さは109cmである。

[壁] 東西壁はオーバーハングして袋状に立ち上がる。南北壁はやや外側へ直線的に立ち上がり、開口部近くで外側へ屈曲して立ち上がる。

[底面] 全体として東側から西側へ若干の傾斜が見られる。また、若干の起伏が見られるが、ほぼ平坦である。

[覆土] 6層に分層した。黒色土、黒褐色土が堆積し、黒褐色土は、ローム粒、ロームブロックを中量ないし多量含むが崩落土と考えられる。自然堆積と思われる。

[出土遺物] なし。

[時期] 不明である。

4. 柱穴状ピット

第1号柱穴状ピット（第17図）

[位置・確認層] I-7グリッドに位置する。第1号竪穴住居跡覆土において確認した。

[重複] 第5号竪穴住居跡と重複し、本遺構が新しい。

[平面形・規模] 平面形は不整な円形を呈する。開口部は径47cm、底面は径25cm、深さは19cmである。

[壁] 外側へ緩やかに立ち上がる。

[底面] ほぼ平坦である。

[覆土] 黒褐色土が堆積し、ローム粒を微量含む。自然堆積と思われる。

[出土遺物] なし。

[時期] 不明である。

第2号柱穴状ピット（第17図）

[位置・確認層] C-5グリッドに位置する。第V層において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は不整な隅丸長方形を呈する。開口部は、長軸幅53cm、短軸幅42cm、底面は径25cm、深さは33cmである。

[壁] 全体として外側へ直線的に立ち上がる。

[底面] 段差が見られる。

[覆土] 2層に分層した。黒色土、黒褐色土が堆積し、ローム粒、ロームブロックを微量含む。自然堆積と思われる。

[出土遺物] 覆土より縄文土器が1点(第23図9)出土している。

[時期] 不明である。

第3号柱穴状ピット(第17図)

[位置・確認層] C-6グリッドに位置する。第3号土坑覆土、第9号土坑覆土、第V層において確認した。

[重複] 第3号土坑、第9号土坑と重複し、本遺構が新しい。

[平面形・規模] 平面形は、不整な橢円形を呈する。開口部は29cm×26cm、底面は22cm×19cm、深さは39cmである。

[壁] 外側へ屈曲して立ち上がる。

[底面] ほぼ平坦である。

[覆土] 2層に分層した。第1層は黒褐色土が堆積し、ローム粒、ロームブロックを少量含む。自然堆積と思われる。

[出土遺物] なし。

[時期] 不明である。

第4号柱穴状ピット(第17図)

[位置・確認層] B・C-7グリッドに位置する。第V層において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は不整な橢円形で、開口部は36cm×29cm、底面は28cm×25cm、深さは24cmである。

[壁] 全体としてやや外側へ直線的に立ち上がる。西壁は一部オーバーハングして袋状に立ち上がる。

[底面] 中央部へ若干の傾斜が見られるがほぼ平坦である。

[覆土] 2層に分層した。第1層は黒褐色土が堆積し、ローム粒を微量含む。自然堆積と思われる。

[出土遺物] なし。

[時期] 不明である。

第6号柱穴状ピット(第17図)

[位置・確認層] G-11グリッドに位置する。第V層において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は不整な橢円形で、開口部は32cm×29cm、底面は18cm×15cm、深さは40cmである。

[壁] 全体として外側へ直線的に立ち上がる。

[底面] ほぼ平坦である。

[覆土] 黒色土が堆積し、ローム粒を微量含む。自然堆積と思われる。

[出土遺物] なし。

[時期] 不明である。

第7号柱穴状ピット（第17図）

[位置・確認層] G-11 グリッドに位置する。第V層において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は不整な楕円形で、開口部は 33 cm × 23 cm、底面は 16 cm × 14 cm、深さは 32 cm である。

[壁] 全体として外側へ直線的に立ち上がる。

[底面] ほぼ平坦である。

[覆土] 黒色土が堆積し、ローム粒を微量含む。自然堆積と思われる。

[出土遺物] なし。

[時期] 不明である。

第8号柱穴状ピット（第17図）

[位置・確認層] G-12 グリッドに位置する。第V層において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は不整な楕円形で、開口部は 36 cm × 33 cm、底面は 24 cm × 24 cm、深さは 26 cm である。

[壁] やや外側へ直線的に立ち上がる。

[底面] 段差が見られる。

[覆土] 2層に分層した。第1層は黒色土が堆積し、ローム粒を微量含む。自然堆積と思われる。

[出土遺物] なし。

[時期] 不明である。

第9号柱穴状ピット（第17図）

[位置・確認層] F-12 グリッドに位置する。第V層において確認した。

[重複] なし。

[平面形・規模] 平面形は不整な楕円形で、開口部は 30 cm × 26 cm、底面は 22 cm × 18 cm、深さは 28 cm である。

[壁] 外側へ若干オーバーハング気味に立ち上がる。

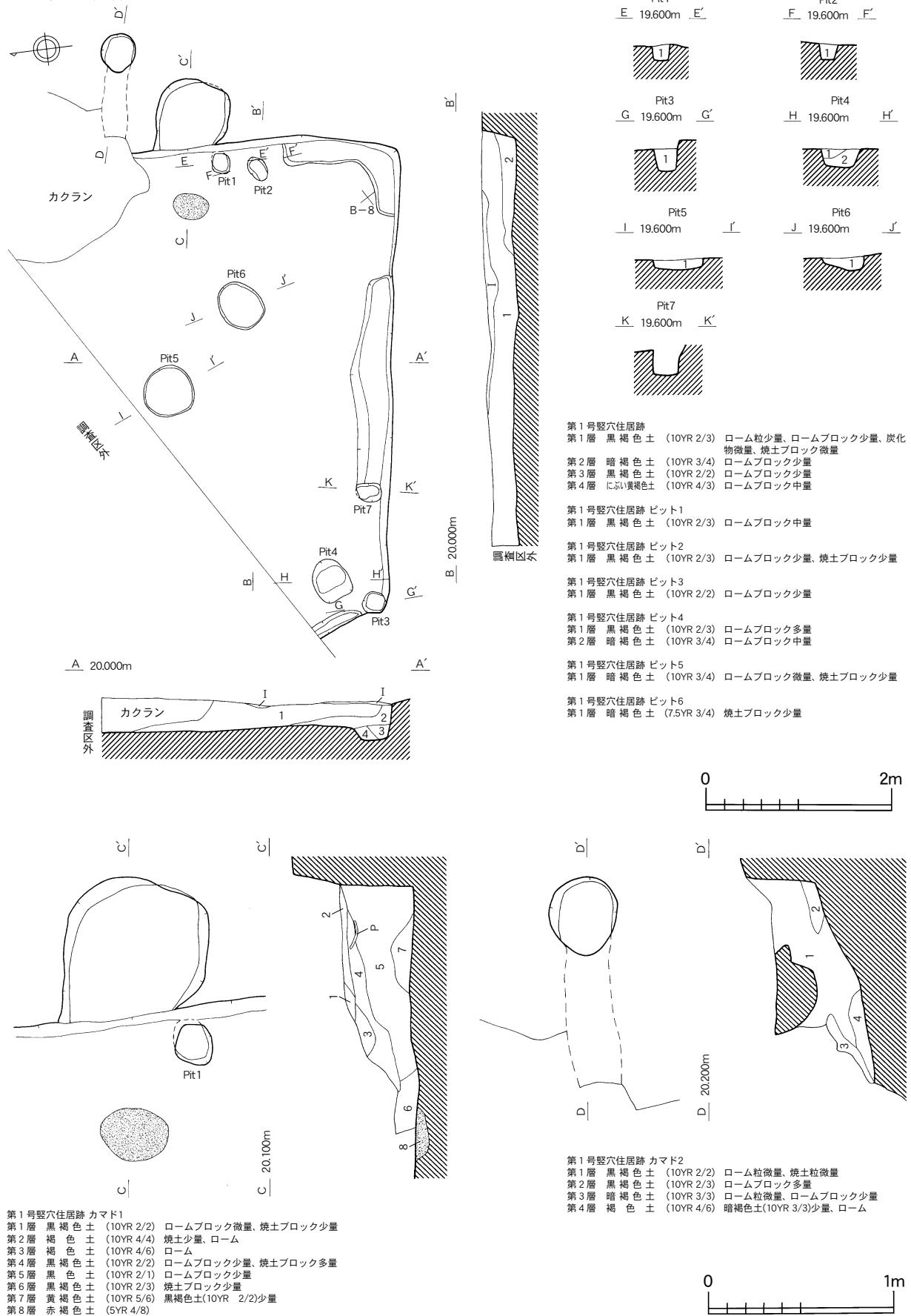
[底面] ほぼ平坦である。

[覆土] 2層に分層した。第1層は黒色土が堆積し、ローム粒を微量含む。自然堆積と思われる。

[出土遺物] なし。

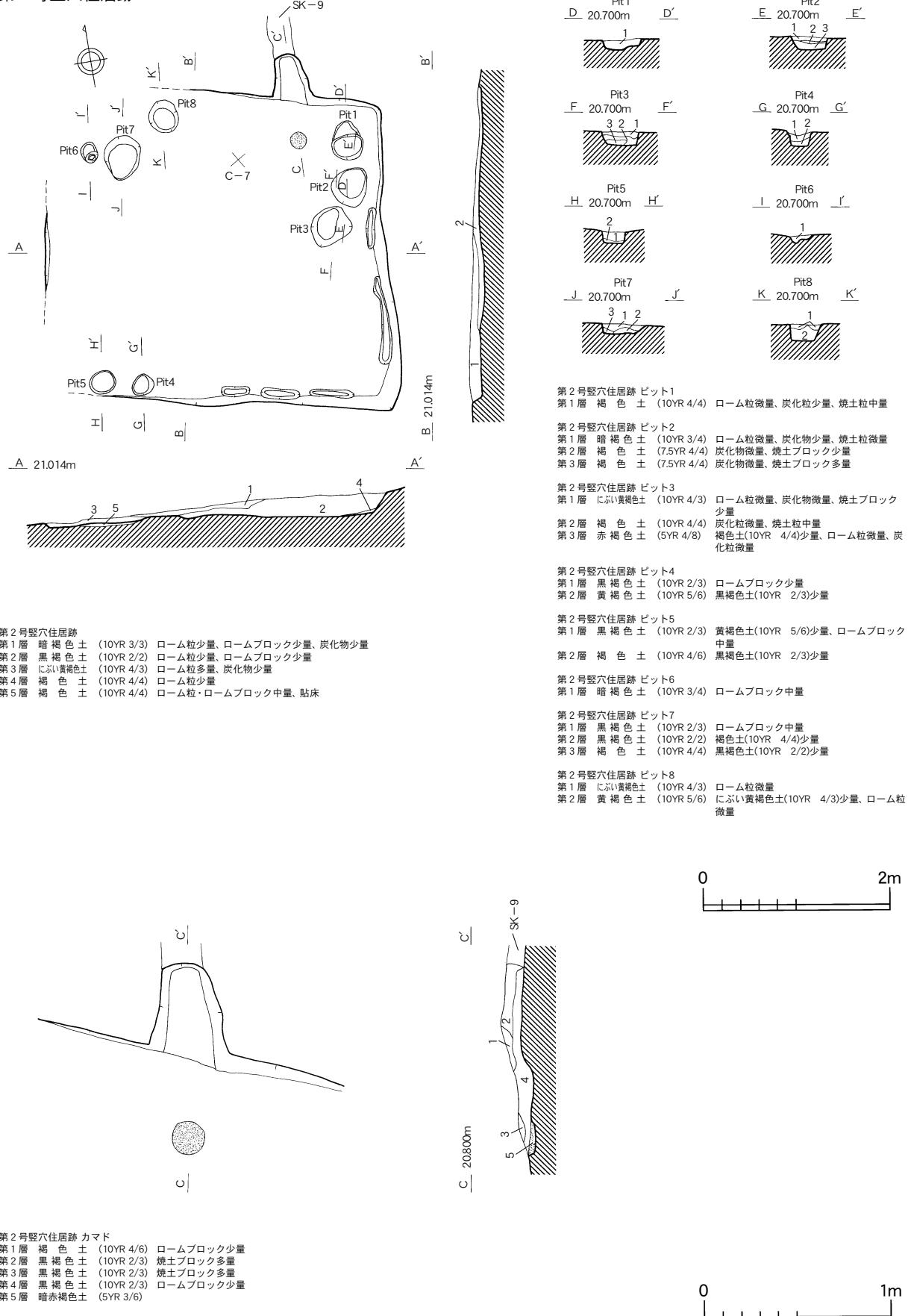
[時期] 不明である。

第1号竪穴住居跡



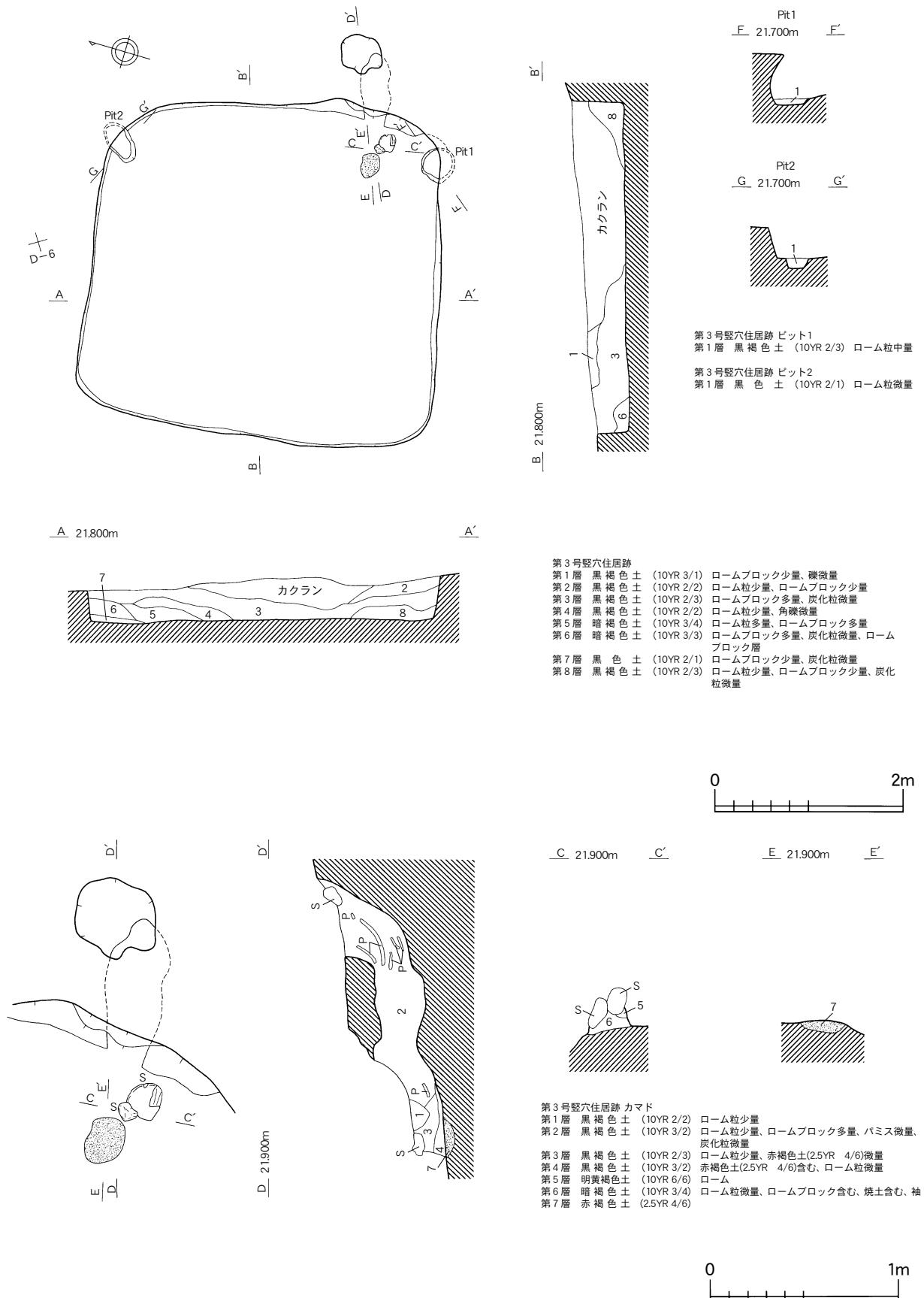
第8図 第1号竪穴住居跡

第2号竪穴住居跡



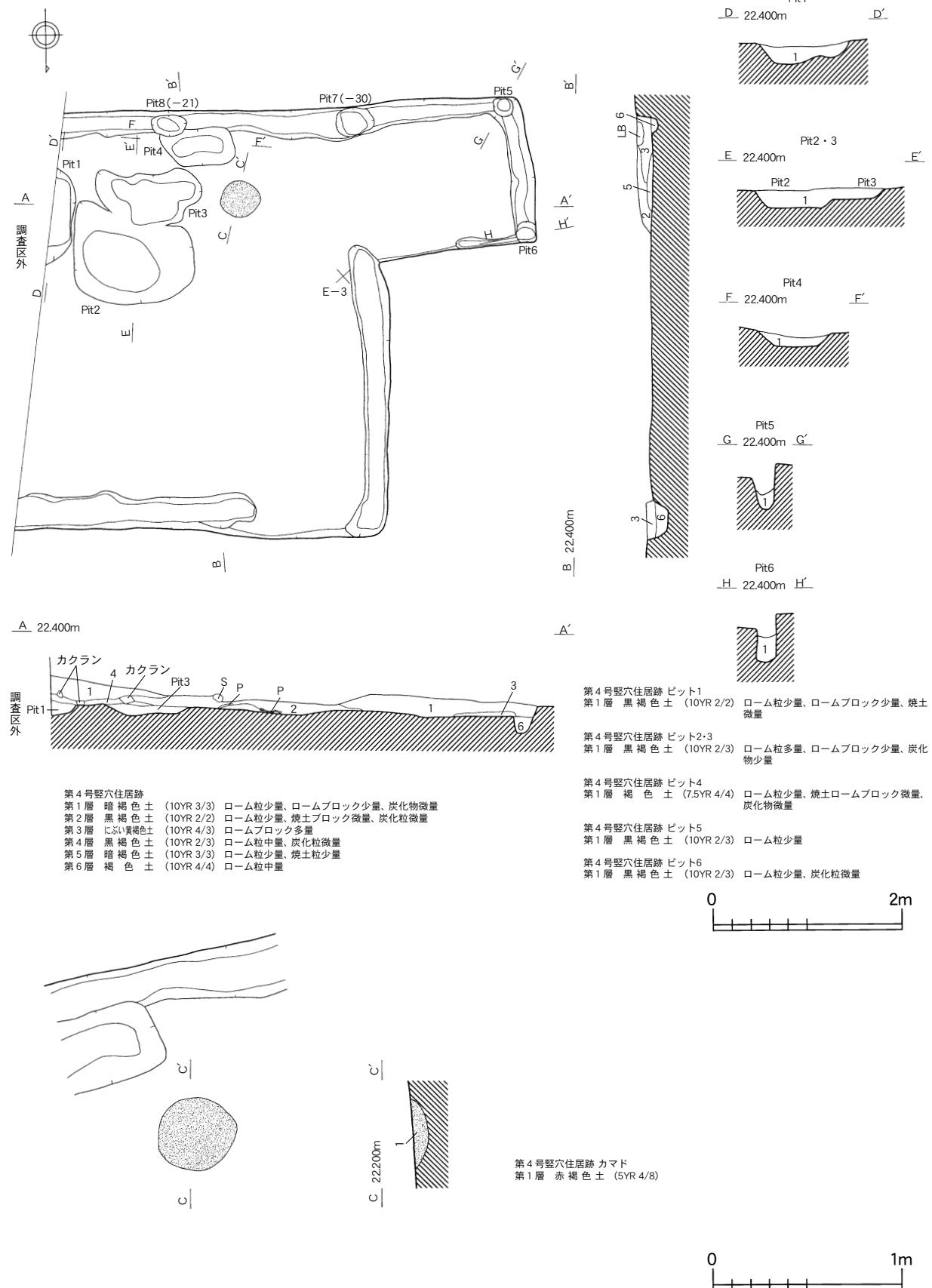
第9図 第2号竪穴住居跡

第3号竪穴住居跡



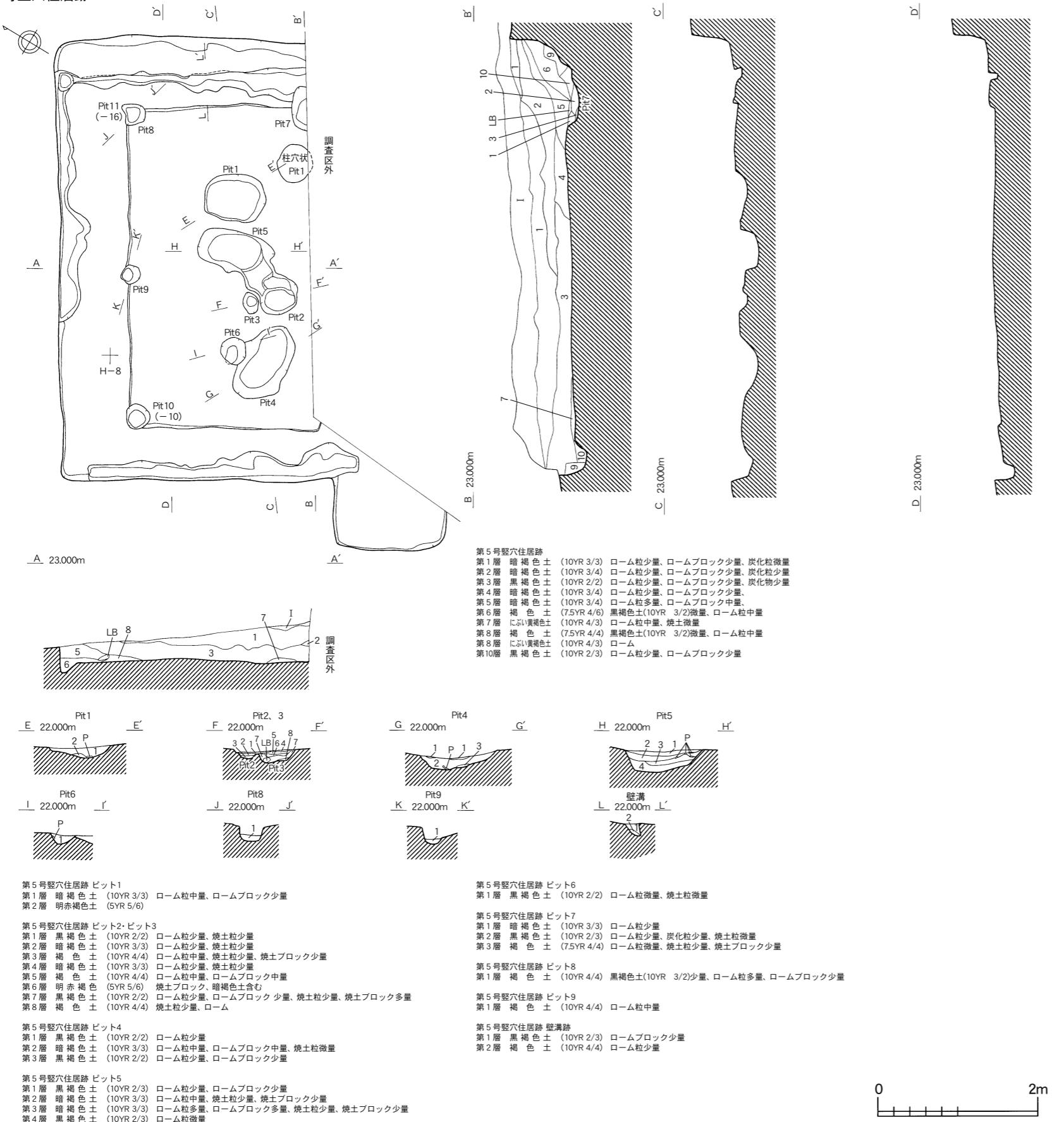
第10図 第3号竪穴住居跡

第4号竪穴住居跡



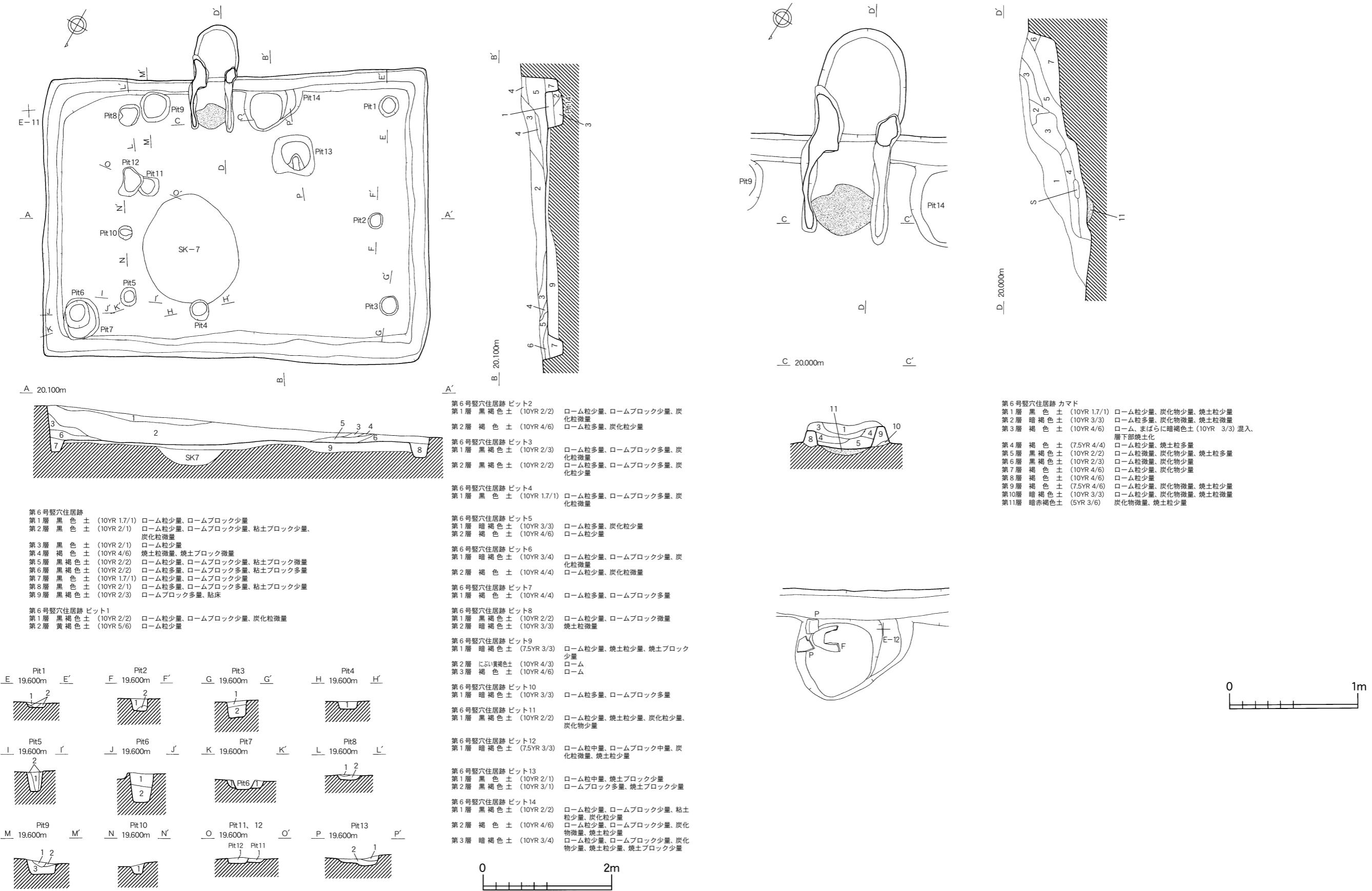
第11図 第4号竪穴住居跡

第5号竪穴住居跡



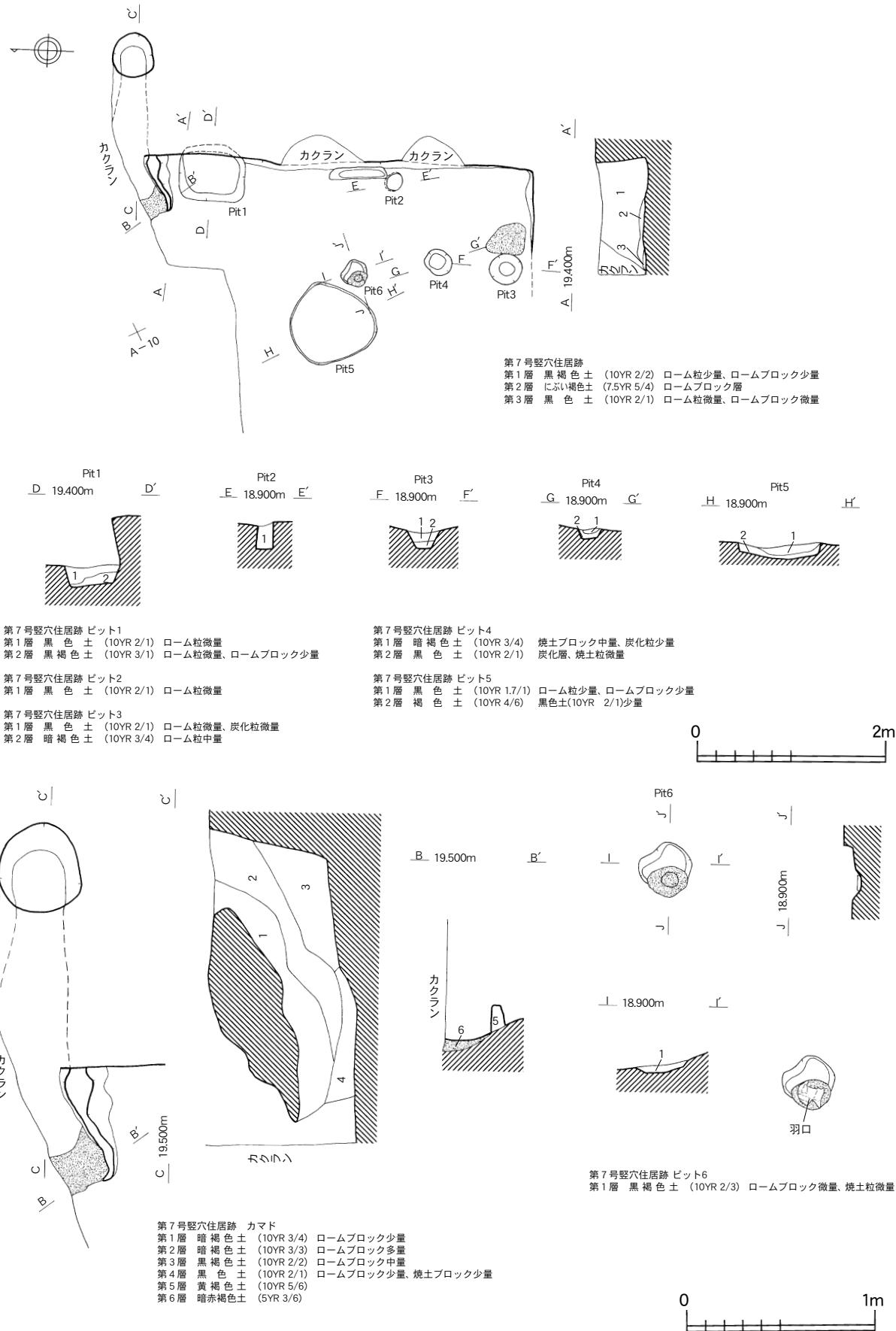
第12図 第5号竪穴住居跡

第6号竪穴住居跡



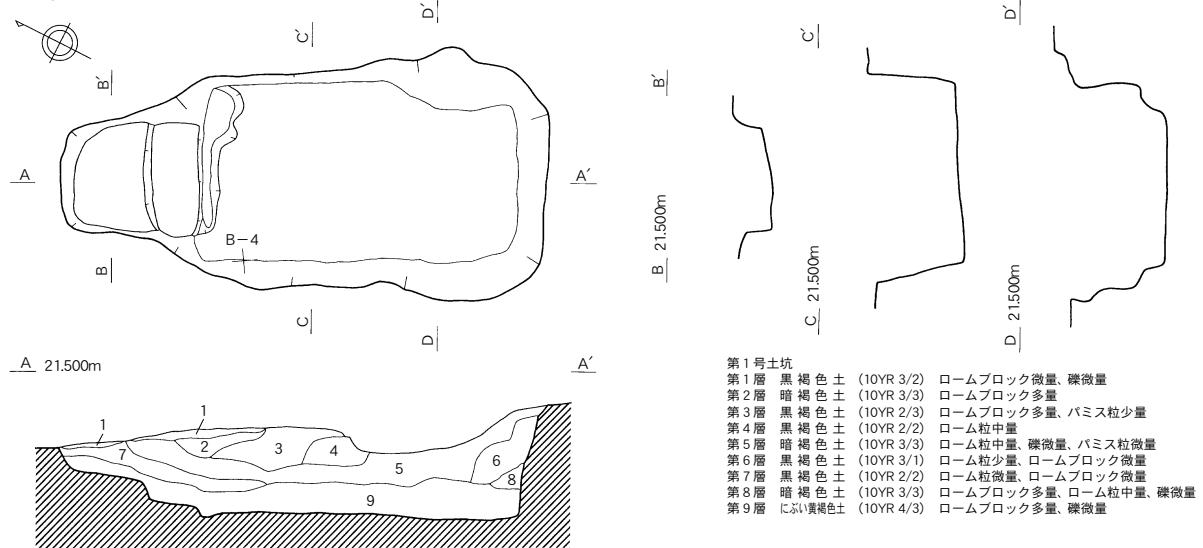
第13図 第6号竪穴住居跡

第7号竪穴住居跡

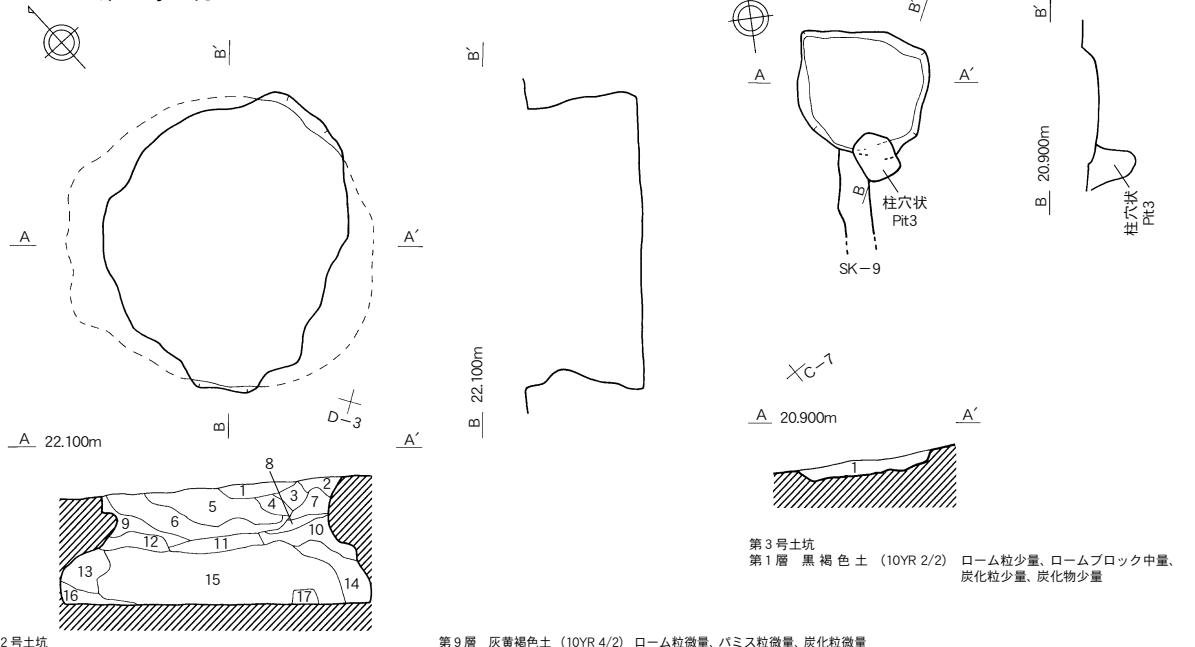


第14図 第7号竪穴住居跡

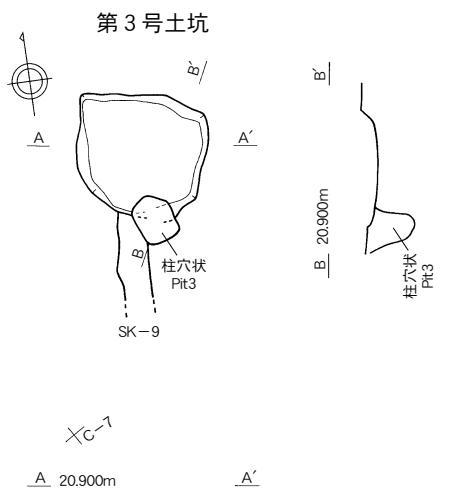
第1号土坑



第2号土坑

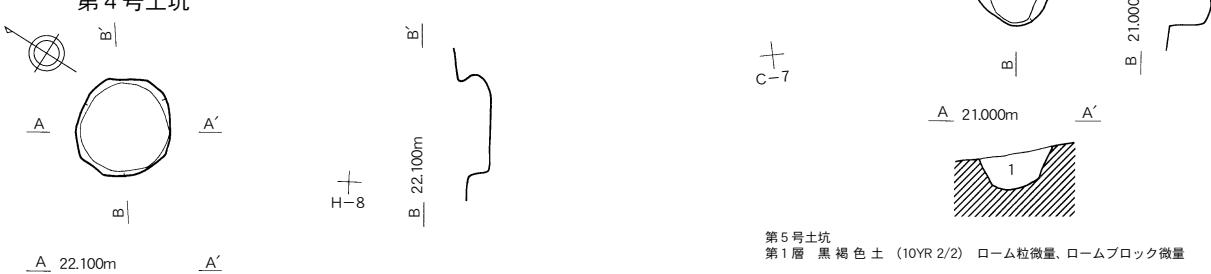


第3号土坑

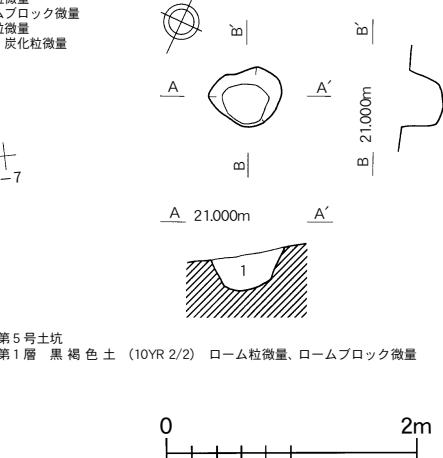


第4号土坑
第1層 黒褐色土 (10YR 2/2) ローム粒少量、ロームブロック中量、炭化粒少量、炭化物少量

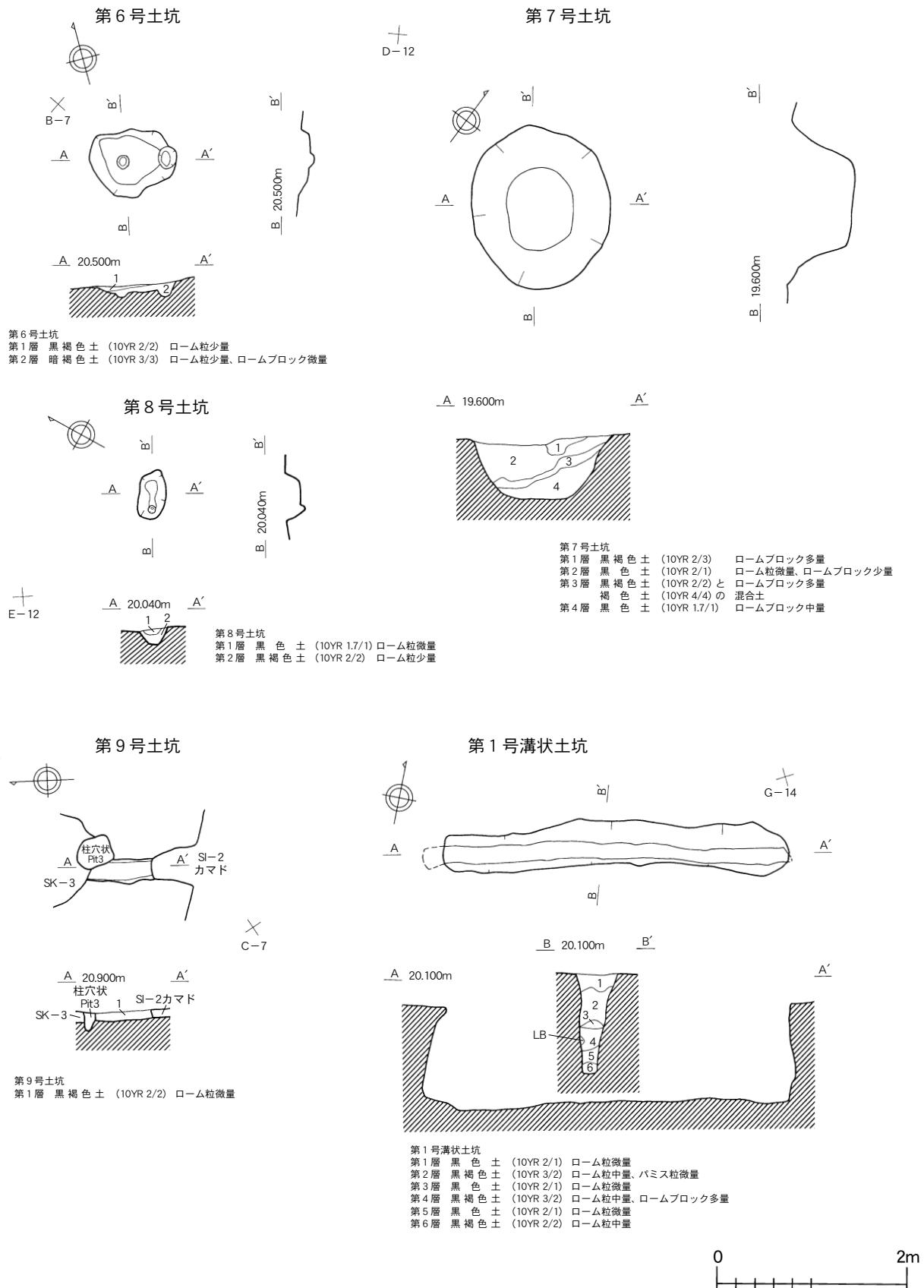
第4号土坑



第5号土坑



第15図 土坑(1)



第16図 土坑(2)・溝状土坑



第17図 柱穴状ピット

第2節 出土遺物

1. 土器

縄文土器と平安時代の土師器、須恵器が出土している。平安時代については、おおむね10世紀中葉～後半の時期と思われる。ダンボール箱換算で10箱の出土遺物中、平安時代の土師器が主体を占める。

○縄文土器(第22図9、第23図8、9、第26図8～12)

・縄文時代前期の土器(第22図9、第23図8、第26図8、9)

第22図9は、口縁部片である。LRとRを縦位、横位、斜位に押圧している。前期末葉の円筒下層d₁式土器と思われる。第23図8、第26図8、9は、胴部片である。第23図8と第26図9は、横位に結束第一種の回転文が施されている。第23図8は、LRとRL、第26図9は、RLによる結束である。第26図8は、LRが縦位に施されている。また、いずれも胎土に纖維を含む。おおむね縄文時代前期末葉の土器と思われる。

・縄文時代中期の土器(第26図10～12)

いずれも胴部片である。第26図10は、RLによる地文を施した後、細めの隆帯を貼付し、隆帯外面にL押圧による刻みを施している。第26図11は、地文を磨り消した後、細めの隆帯を貼付し、隆帯外面にL押圧による刻みを施している。中期中葉の円筒上層d式土器と思われる。第26図12は、胎土に砂粒を含み、LRが縦位に施されている。おおむね中期後半の土器と思われる。

・縄文時代晩期の土器(第23図9)

胴部片である。RLが横位に施されている。おおむね晩期の土器と思われる。

○土師器

・壺(第18図2、7～9、第19図2、第20図2～5、14～16、第21図6～8、第23図1～3、第26図1、2)

20点図示した。いずれも口クロ成形によるものである。内面に黒色処理の見られるもの(第18図2、7、8、第20図2～4、14、15、第21図6、第23図1、2、第26図1)と見られないもの(第18図9、第19図2、第20図5、第20図16、第21図7～9、第23図3、第26図2)がある。黒色処理の見られるものは、内面にヘラミガキが施されるが、他はおおむね切離し後無調整である。底面が確認できるものは回転糸切による切離しで、右回転が多数である。第18図9は、高台付壺の底部片である。回転糸切による切り離し後、高台部を接合し、底面にナデを施している。

断面形状では、全体に内湾して立ち上がるものと、直線的に立ち上がるもの(第21図7～9、第23図1～3)があり、全体に内湾して立ち上がるものには、口唇部がやや外半するもの(第18図2、7、第20図2、4、第20図15、16、第21図6)、自然に立ち上がるもの(第18図8、第19図2、第26図1、2)とが見られる。

なお、第21図7は墨書土器である。体部に「十万」の文字が見られる。

・甕(第18図3～6、10、11、第19図3～7、第20図6～9、17、第21図10～14、第22図1～7、第23図4～7、第26図3)

33点図示した。底部まで接合できた資料は少ない。

器面調整に口クロを使用しているもの(第22図6)が1点あるが、その他は、口クロ未使用のものである。口クロを使用する第22図6は、口縁から胴部上半、中程にかけて口クロナデ、胴部中程から下半にかけては口クロナデ後、おおむね縦位のヘラナデによる調整である。その他の口クロ未使用のものは、おおむね口縁部にヨコナデ、胴部に縦位ないし斜位のヘラナデが見られ、残存するものでは底部付近にヘラケズリが見られる。また、内面調整では横位、斜位のヘラナデが多数であるが、縦位のヘラナデも見られる。

口縁部は全般に短いものであるが、断面形状には、頸部で大きく外反するもの。(第22図7)、頸部で屈曲して外反するもの。(第18図11、第19図3、6、第20図8、9、第21図11～13、第23図4)、頸部で湾曲しながら外反するもの(第18図3、5、6、10、第19図4、5、第20図7、17、第21図11～14、第23図5、6)、外反の度合いが弱いもの。(第18図4、第20図6、第21図10、第22図1、3～5、第26図3)などが見られる。

○須恵器(第18図1、第19図1、第20図1、10～13、第21図1～5、第26図4～7)

・甕(第19図1、第20図1、第20図11、第26図4～7)

第20図1は遺構内出土、第26図4～6は遺構外出土の胴部片である。いずれも外面にタタキ目が見られる。第19図1、第20図11は底部片である。外面にヘラナデが見られる。

・壺(第18図1、第20図10、12、13、第21図1～5)

第18図1、第20図10は口縁部片、第21図1は頸部片である。広口壺と思われる。第20図13、第21図3、4は肩部片、第20図12、第21図2、5は、胴部片である。第20図12は外面にタタキ目が見られる、第21図2は、胴下半部にヘラナデが見られるほか、火ダスキ痕が見られる。いずれも広口壺と思われる。

○擦文土器(第22図9)

1点のみの出土である。器面に横位の綾杉文が施されているものと思われる。

2. 石器

本遺跡で遺構内外より出土した石器は、不定形石器、敲磨器、砥石、石皿及び剥片である。遺構内より13点、遺構外より3点、計16点が出土している。

○不定形石器(第24図1、2、第26図13)

遺構内から2点、遺構外から1点、計3点が出土している。石質は全て珪質頁岩である。

○剥片(第26図14)

遺構外から1点が出土している。石質は珪質頁岩である。

○敲磨器(第24図3、4、6、8、12、13、第26図15)

遺構内から6点、遺構外から1点、計7点が出土している。擦痕のみが見られるもの(第24図3、6)、敲打痕のみが見られるもの(第24図4)、擦痕と敲打痕が共に見られるもの(第24図8、12、13、第26図15)とが見られる。いずれも擦痕は側面ないし側縁に、敲打痕は側面中央ないし側縁端部に認められる。石質は凝灰岩が4点、安山岩が3点である。

○砥石(第24図5、10、11)

遺構内から3点が出土した。第24図5、11は、砥面が一面で、第24図5は、側面に長軸方向に、第24図11は、側面に長軸方向に対して斜めに、筋状の痕跡が見られる。第24図10は、棒状を呈し、全側面を砥面としており、横断面はほぼ方形を呈し、一隅を除き角張っている。また、一側面には筋状の落ち込みが長軸方向に見られる。石質は第24図5が溶結凝灰岩、他2点が凝灰岩である。

○石皿(第24図7、9)

遺構内から2点が出土している。いずれも欠損しており、第24図7は器面片側に、第24図9は、両面に擦痕が見られる。石質はいずれも安山岩である。

3. 土製品(第25図1~3)

遺構内から3点が出土している。第25図1は焼成粘土塊である。第25図2、3は支脚で、カマドで使用されたと考えられるが、いずれも破片で出土している。

4. 石製品(第25図5、第26図16)

遺構内から1点、遺構内から1点、計2点が出土している。第25図5はおおむね棒状、第26図16は板状を呈する。いずれも全面が研磨されており、部分的に筋状の痕跡が認められる。なお、いずれも一部を欠損している。石質は、凝灰岩、頁岩である。

(小野 貴之)

5. 鉄関連遺物

本遺跡からは、鉄滓4点・羽口4点・鉄製品5点が出土した。その多くが竪穴式住居跡床面・住居内土坑・ピットから出土したものである。

1) 鍛冶関連遺物

A. 炉壁(第27図1)

炉体の外周部にある壁である。S I - 7より1点出土した。長軸36×短軸14×厚さ11mmを測る。炉内側と考えられる部分がガラス化している

B. 楠形鍛冶滓(第27図2~4)

鍛冶工程で鍛冶炉の炉底や木炭層中において鍛冶対象物から溶融した滓分や半溶解の鉄が重層して形成された楕形の滓である。

楕形鍛冶滓(中)(第27図2・3)

直径が10センチ前後と推定される楕形鍛冶滓である。2点が出土した。第27図2はS I - 6から出土し、第27図3は遺構外出土である。第27図2は長軸103×短軸72×厚さ30mmを測る。破面数は1である。表面には小さな木炭が付着しているほか、羽口や炉壁が溶融したと考えられるガラス化した部分や気孔が存在する。破面にも気孔が存在するが滓は緻密である。裏面は錆化のため茶褐色を呈し、酸化土砂のほか、気孔が存在する。第27図3は長軸69×短軸51×厚さ35cmを測る。表面にはわずかな気孔と微細な木炭粒が存在しており、側面には大小の気孔が散在するが、滓は緻密である。

裏面では大小の木炭痕がみられ、錆化のため、部分的に赤褐色を呈し、それ以外は灰黒色である。

A. 槌形鍛治滓（小）（第27図4）

直径が5cm前後と推定される槌形鍛治滓である。SI-7から1点が出土した。長軸45×短軸30×厚さ22mmを測る。破面数は3を数える。表面には細かい気孔が少数存在し、ガラス化した部分が所々にみられる。側面には細かい気孔が少数存在するが、滓は緻密である。裏面では気孔は少ないと、小さな木炭痕が多く残存する。

B. 鍛治滓（第27図5）

鍛治工程で排出された遺物であるが、槌形鍛治滓に分類できない滓である。SI-7より1点出土した。長軸37×短軸34×厚さ21mmを測る。破面数は2を数える。錆化の影響のため、全体に茶褐色で、破面からみる滓は緻密でない。一部に小さな木炭痕が残る。

C. 羽口（第27図6～9）

SI-7から4点が出土した。第27図6は先端が折損した羽口である。長軸139×短軸89×厚さ33mmで内径は25mmを測る。末端部分はラッパ状に開き、表面にはヘラナデや指頭圧痕のほか、炉体から付着したと思われる赤褐色の粘土が残存している。第27図7は先端部分が残存する羽口である。長軸127×短軸61×厚さ23mmで内径は16である。先端は溶損し、ガラス化しており、気孔が多数みられる。表面には指頭圧痕のほかナデがみられる。第27図8は先端部分を残す羽口片である。長軸65×短軸45×厚さ19mmを測る。内径は不明である。先端部分は溶損していないが、還元色を呈する。

第27図9も先端部分を残す羽口片である。長軸35×短軸39×厚さ27mmを測る。内径は不明である。一部溶損し、ガラス化した箇所がみられる。

2) 鉄製品

A. 鍬先（第27図10・11）

2点が出土している。10は完形であり、11は1／2以上が欠損している。10の方がかなり大型であるが、両者ともに内郭の末端がやや内側に入り込んでいる点が類似している。

B. 刀子（第27図13）

1点出土している。破損しているため、区の有無は判然としない。長軸119×短軸19×厚さ10mmを測る。柄には木質部が残存している。

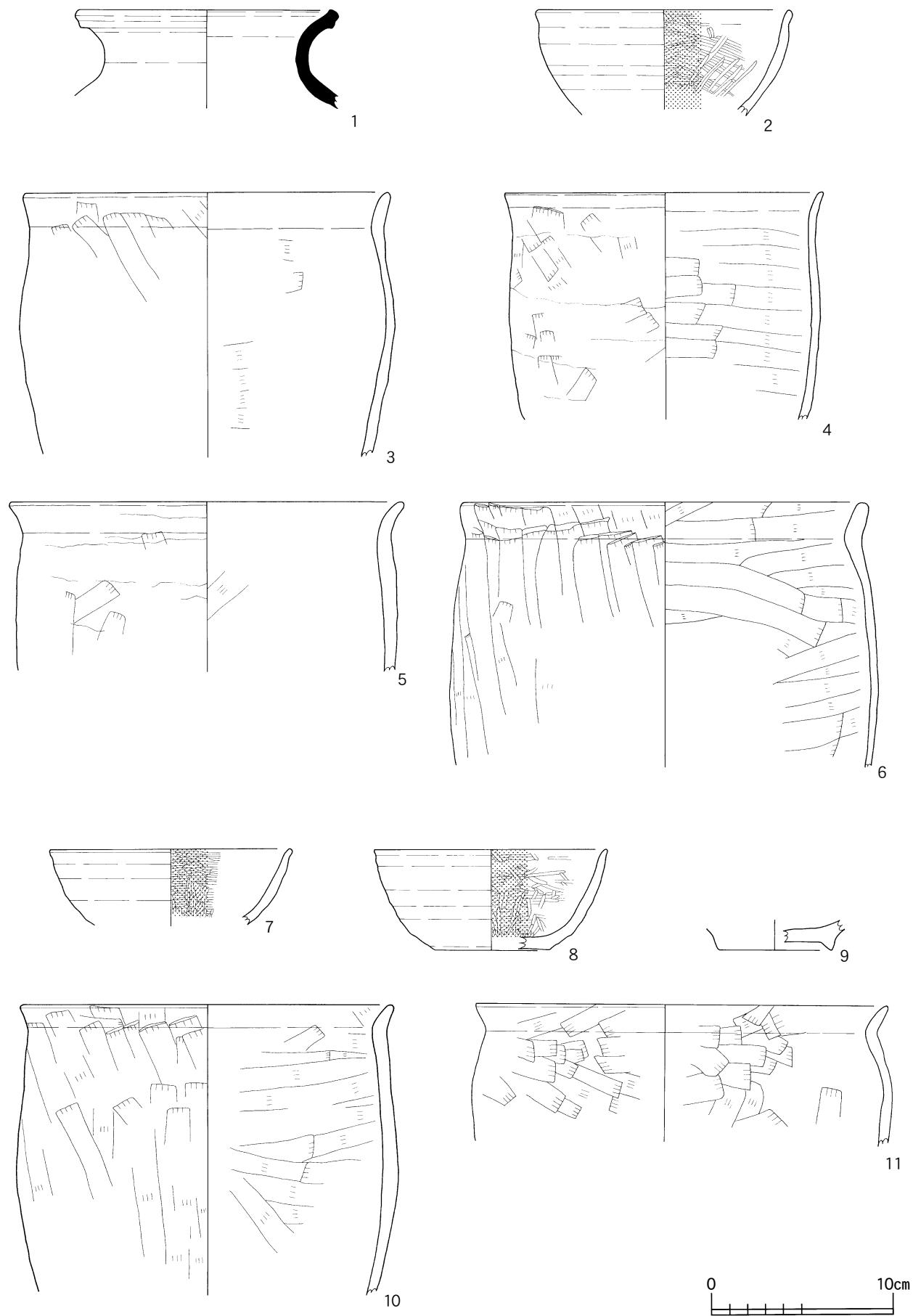
C. 直刀（第27図14）

完形品が1点出土している。長軸317×短軸49×厚さ11mmを測る。区は棟側に存在し、刃部・棟側は尖端から柄の近くまで平行を保ちながら直線的に延びている。末端については丸みを帯びており、そこから区までが柄と考えられるが、柄としては握る部分が短く安定しないので、握りを安定させる工夫があった可能性がある。

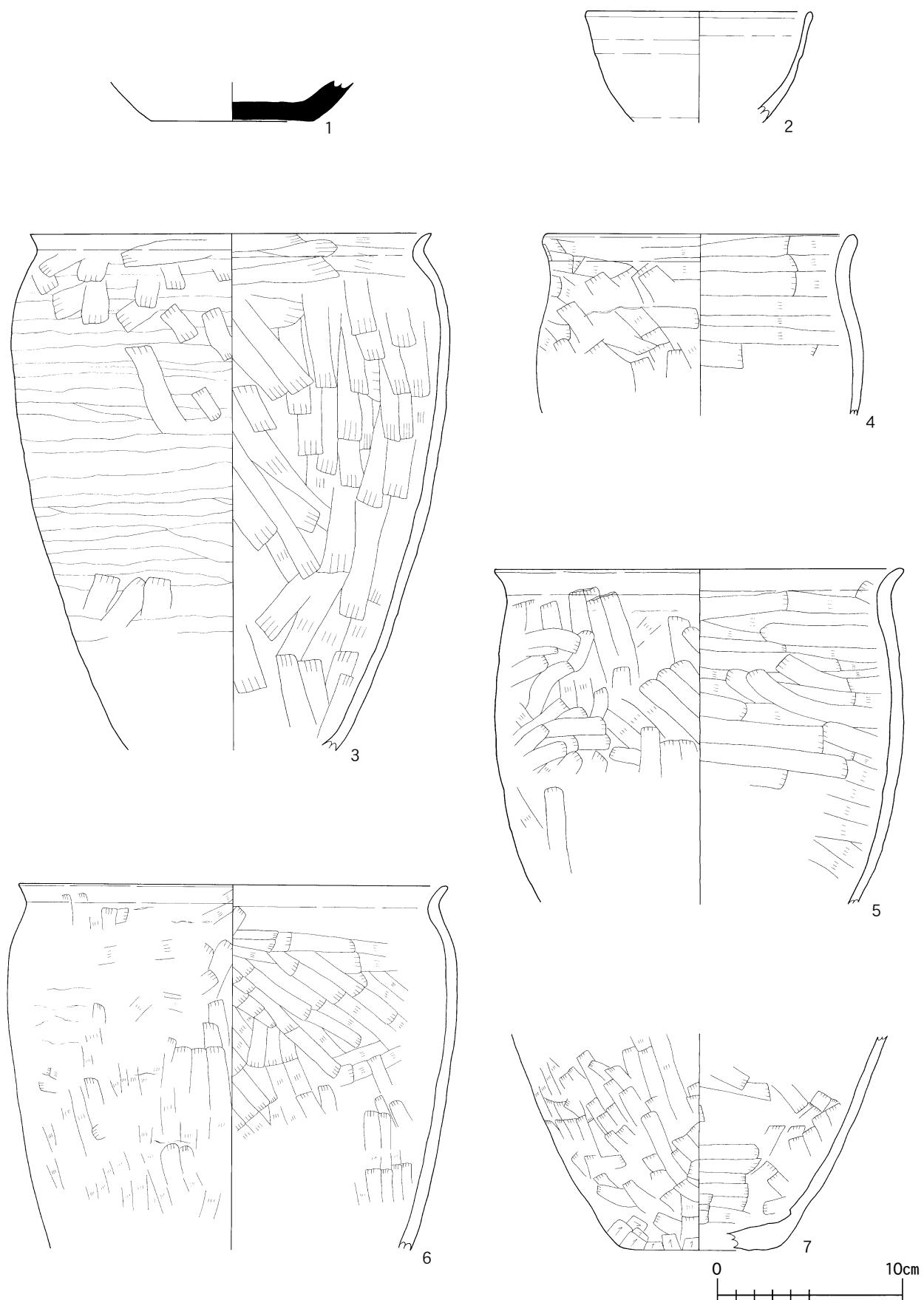
D. 棒状鉄製品（第27図12）

用途が不明な棒状の鉄製品である。1点が出土した。長軸45×短軸9×厚さ5mmを測る。断面は不整形である。

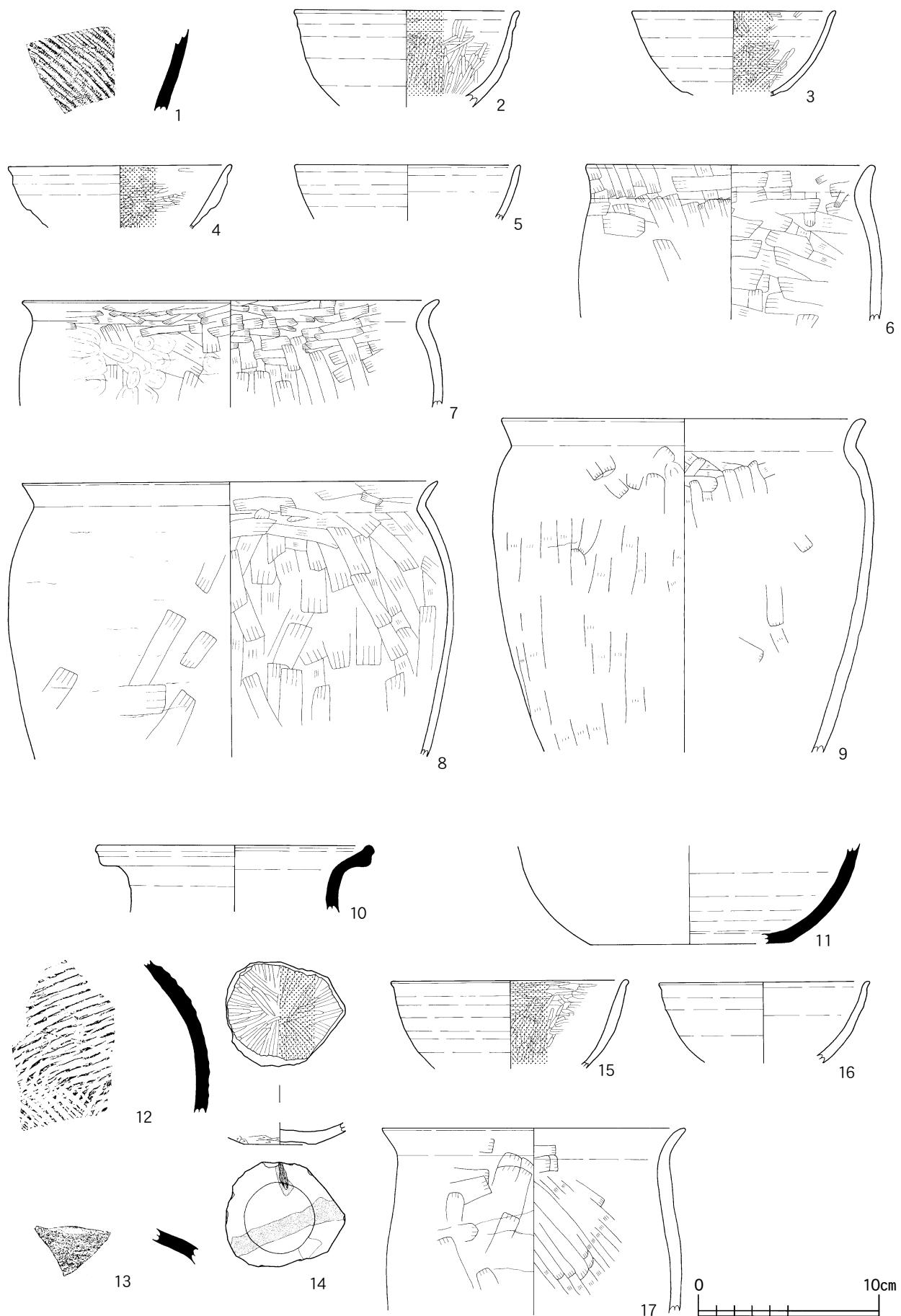
(設楽 政健)



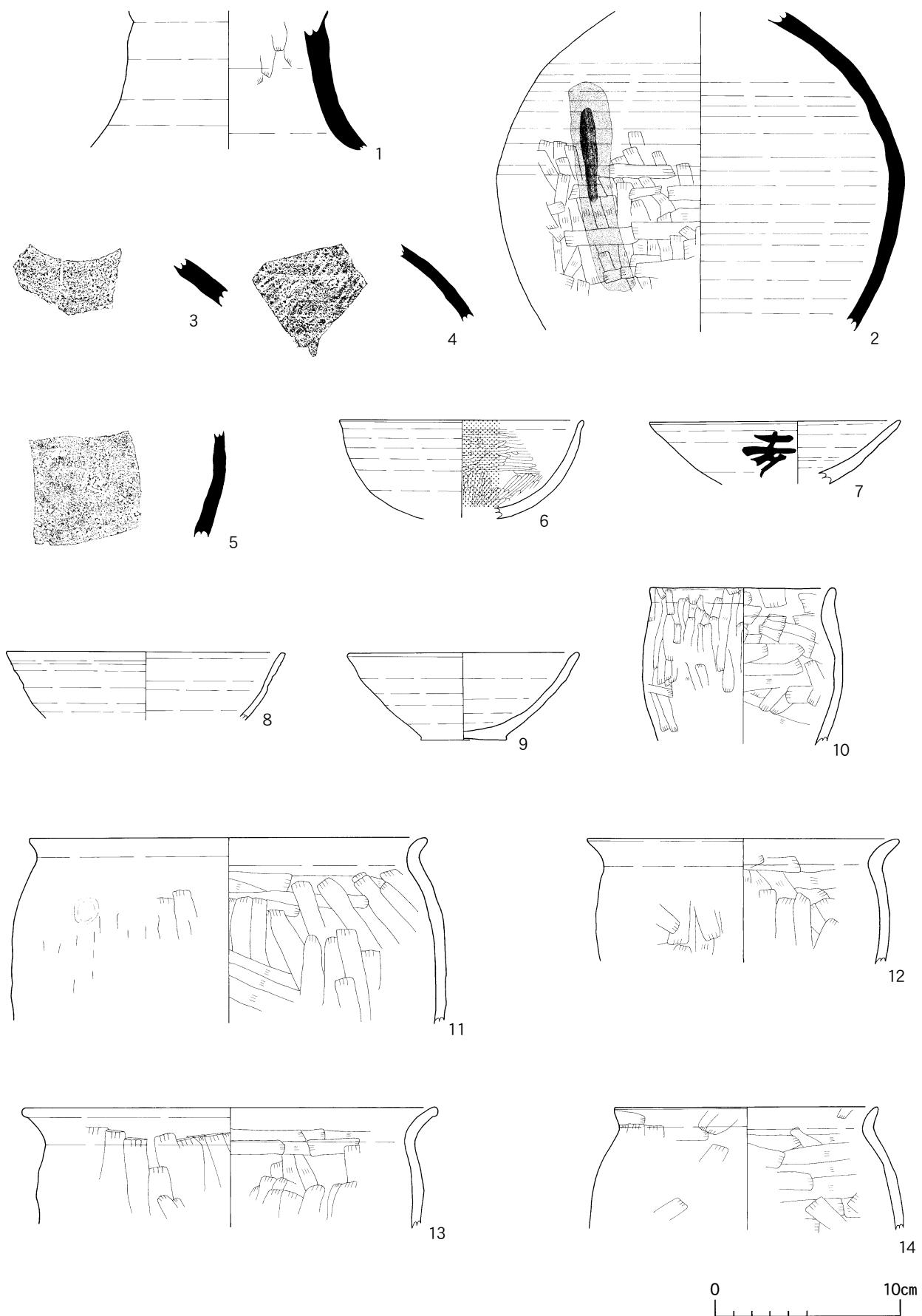
第18図 遺構内出土土器 (1)



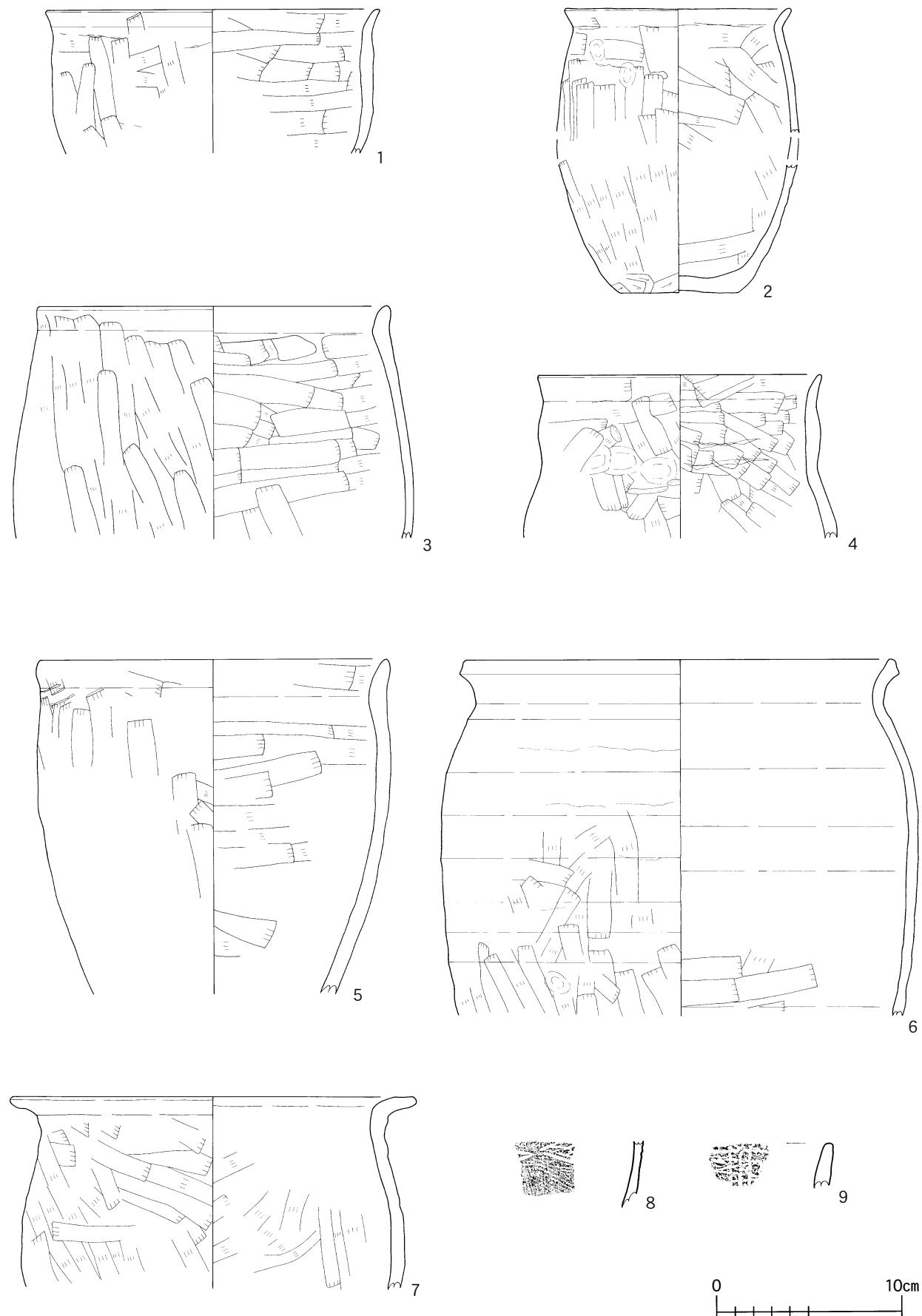
第19図 遺構内出土土器 (2)



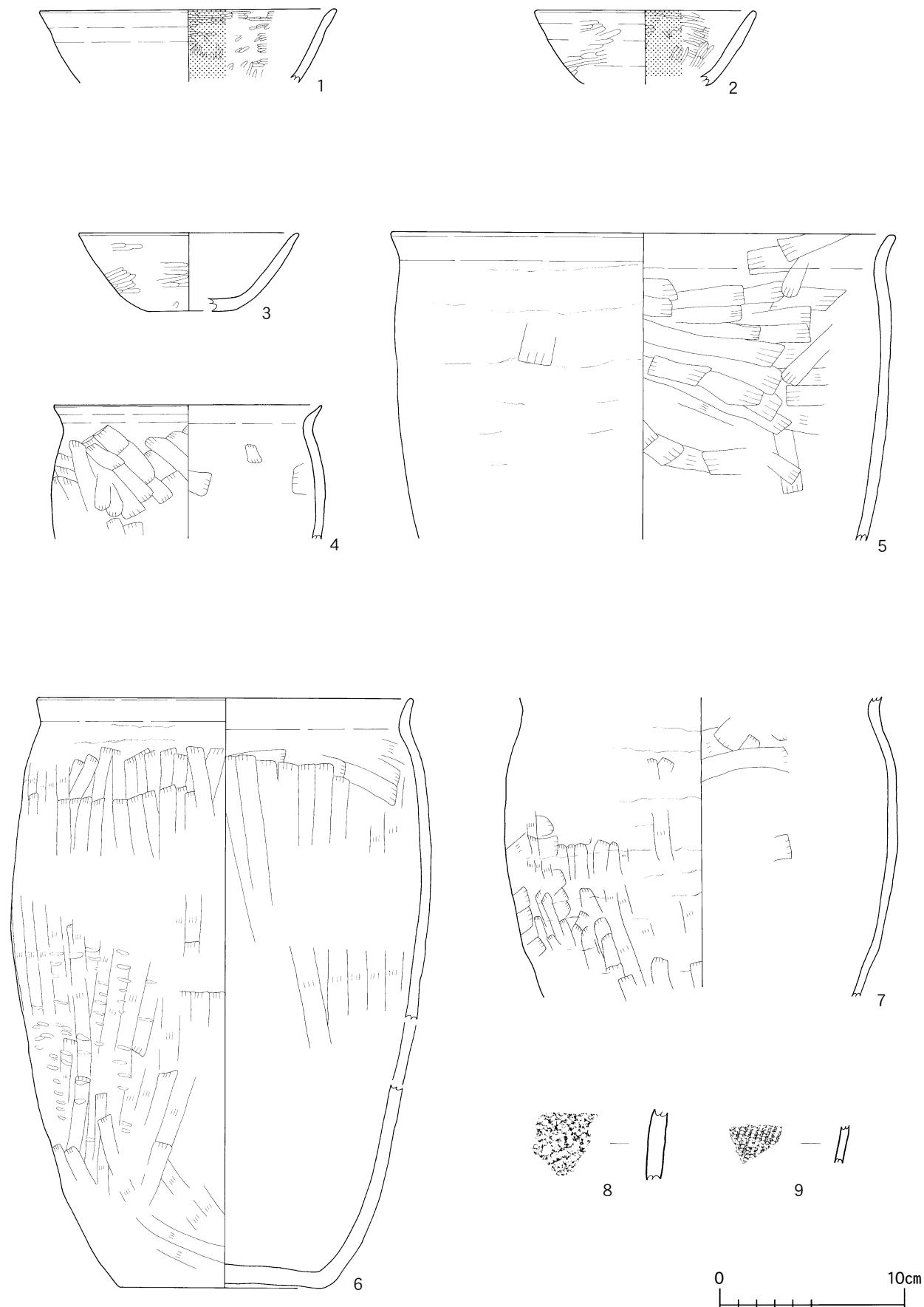
第20図 遺構内出土土器 (3)



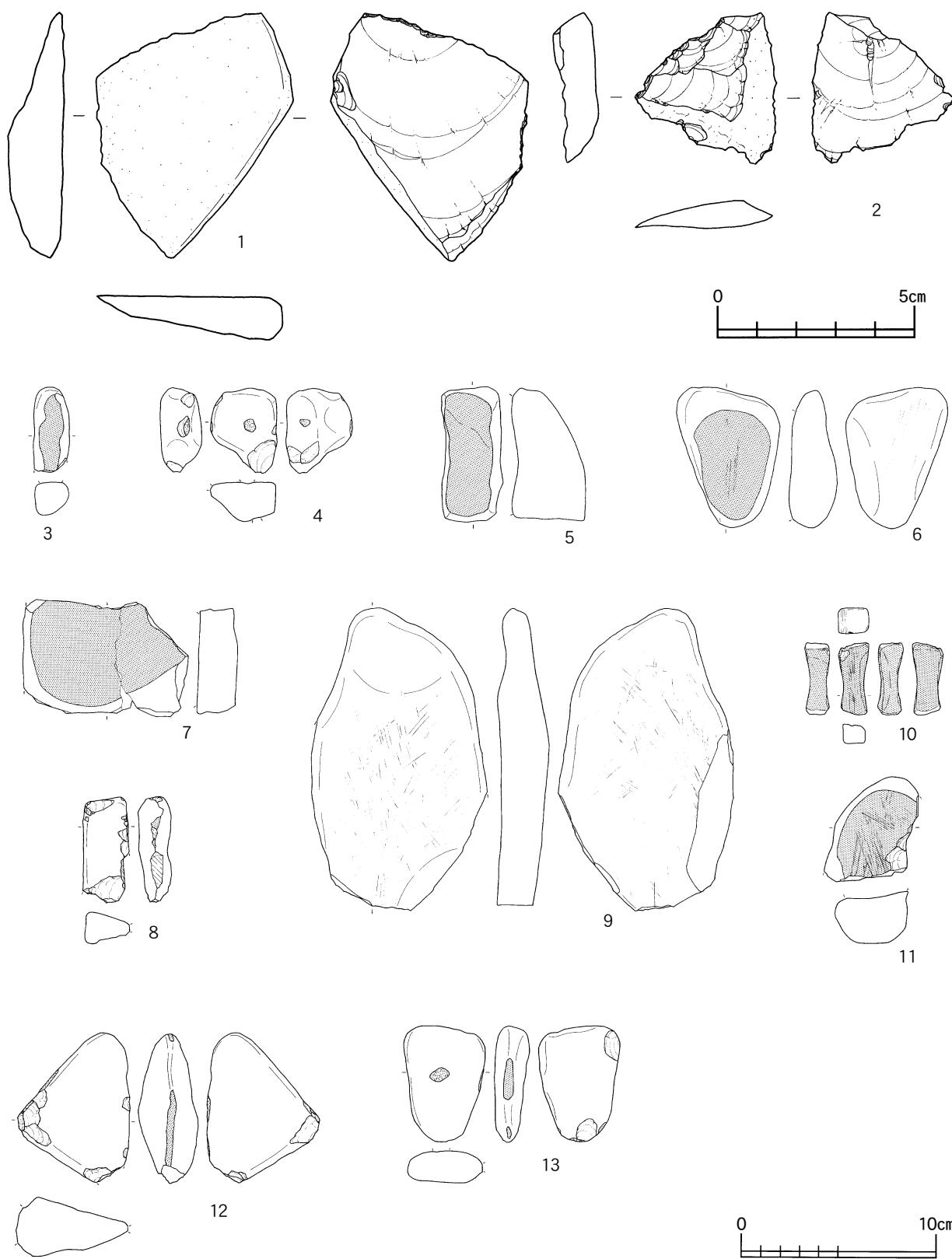
第21図 遺構内出土土器 (4)



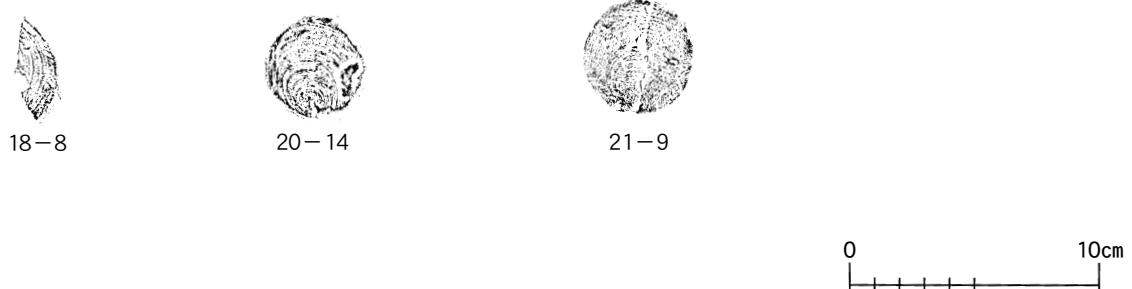
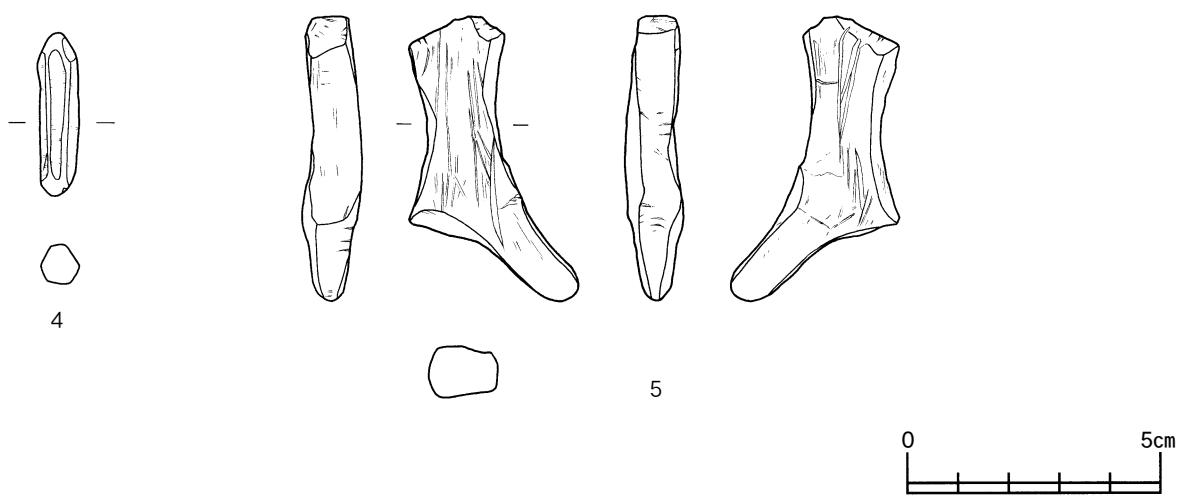
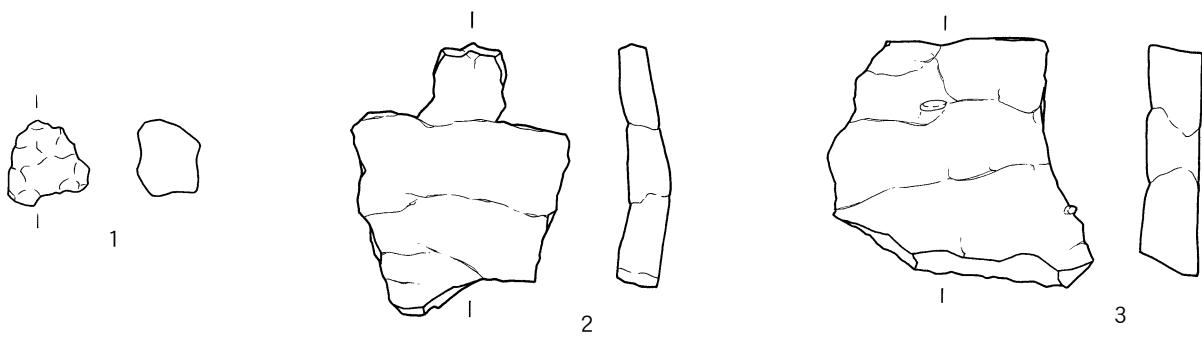
第22図 遺構内出土土器 (5)



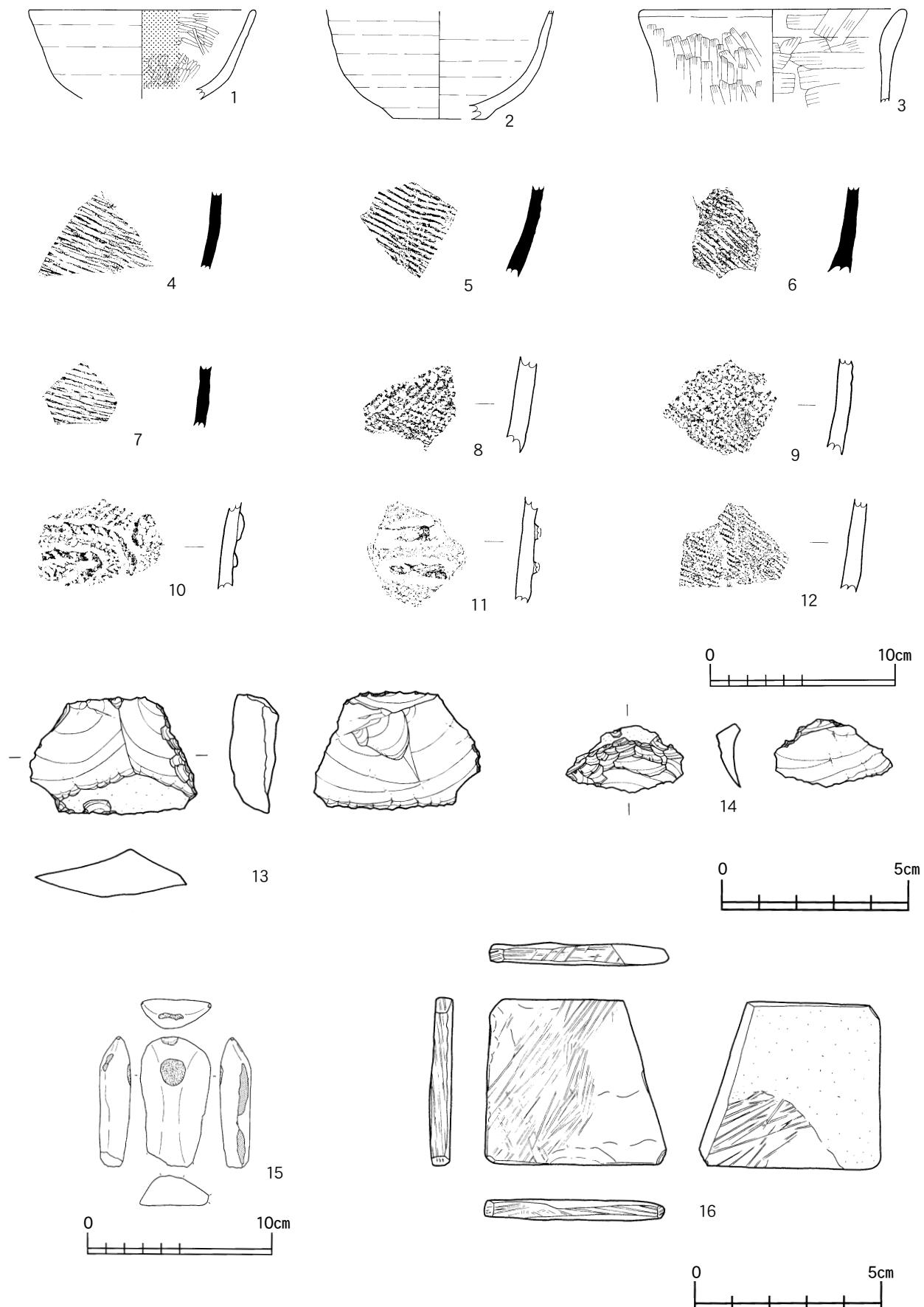
第23図 遺構内出土土器 (6)



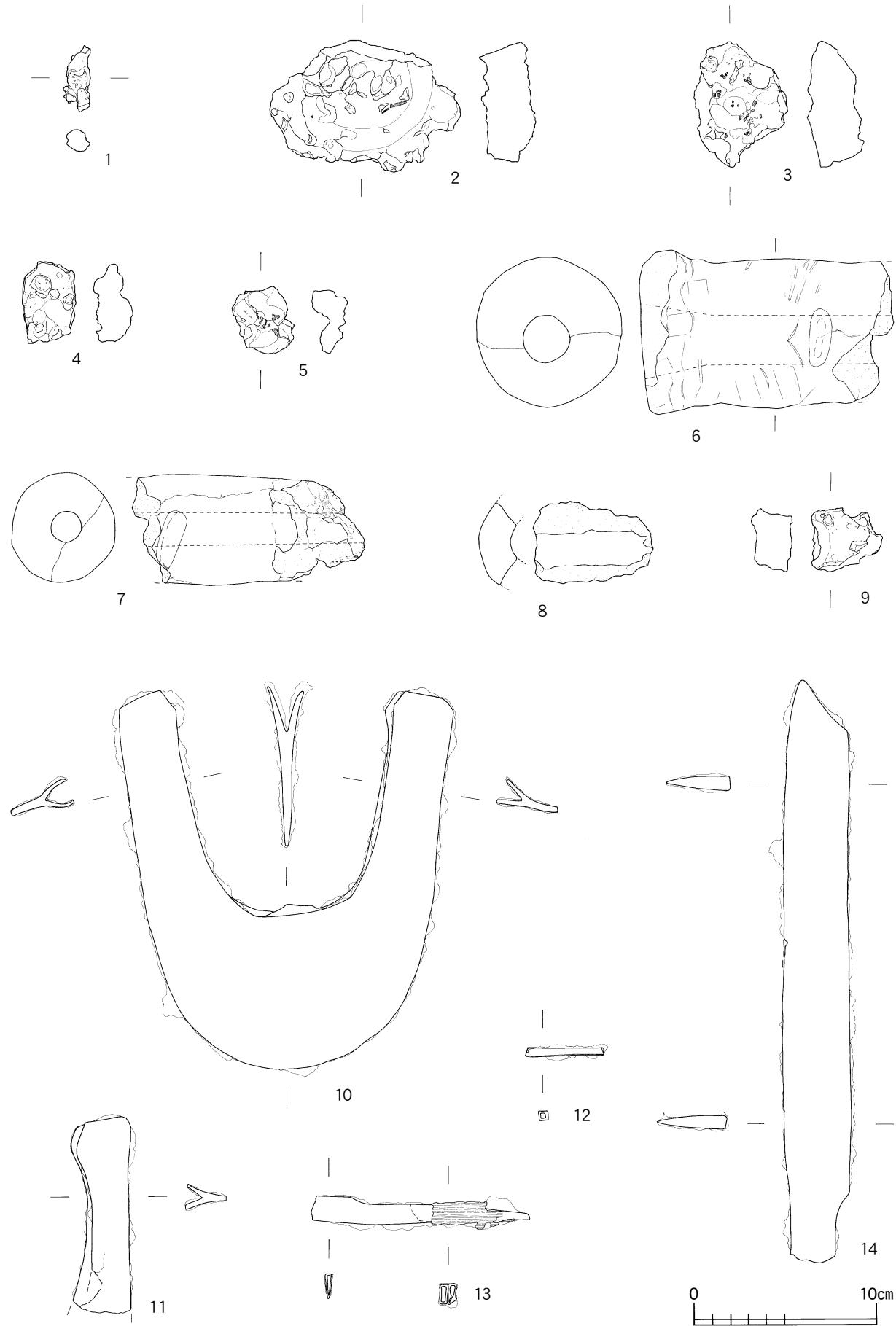
第24図 遺構内出土石器



第25図 遺構内出土土製品・石製品及び土師器(壙)底面拓影



第26図 遺構外出土土器・石器・石製品



第27図 遺構内・遺構外出土鉄関連遺物

第2表 遺構内出土土器観察表(堅穴住居跡)①

図版番号	整理番号	出土地点	層位	種別	器形	部位	口径 cm	器高 cm	底径 cm	外面調整	底面調整	胎土	焼成	備考
22 - 9	05304P058	S1-6	覆土	縦文土器	深鉢	口縁	口縁 L.R.押(横、縦)、R.押(斜)	-	-	-	-	砂粒少量	良好	内面黒色処理
23 - 8	05304P066	S1-7	第1層	縦文土器	深鉢	胸	口縁	口縁 L.R.、R.、結合第一種(LR、RL)(横)	-	-	-	砂粒少量	良好	内面黒色処理

第3表 遺構内出土土器観察表(堅穴住居跡)②

図版番号	整理番号	出土地点	層位	種別	器形	部位	口径 cm	器高 cm	底径 cm	外面調整	底面調整	胎土	焼成	備考	
18 - 1	05304P001	S1-1	覆土	須恵器	壺	(14.0)	(5.4)	-	-	口クロナデ	-	砂粒少量	良好	内面黒色処理	
18 - 2	05304P002	S1-1	覆土	土師器	壺	(13.6)	(5.8)	-	-	ヘラミガキ	ヘラナデ	砂粒少量	良好	内面黒色処理	
18 - 3	05304P003	S1-1	カマド覆土	土師器	壺	(19.8)	(14.5)	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	砂粒多量	良好	内面黒色処理	
18 - 4	05304P004	S1-1	第6層、覆土	土師器	甕	(17.4)	(12.5)	-	-	ヘラナデ、輪積痕	ヘラナデ	砂粒中量	良好	内面黒色処理	
18 - 5	05304P005	S1-1	カマド覆土	土師器	甕	(21.6)	(9.3)	-	-	ヘラナデ、輪積痕	ヘラナデ	砂粒中量	良好	内面黒色処理	
18 - 6	05304P006	S1-1	カマド覆土	土師器	甕	(22.0)	(14.5)	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	砂粒多量	良好	内面黒色処理	
18 - 7	05304P007	S1-2	第1層、覆土	土師器	甕	(13.2)	(4.2)	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	砂粒少量	良好	内面黒色処理	
18 - 8	05304P008	S1-2 Pit3	覆土	土師器	甕	(12.8)	5.5	(6.2)	-	ヘラミガキ	回転糸切	砂粒少量	良好	内面黒色処理	
18 - 9	05304P009	S1-2 Pit3	覆土	土師器	高台付甕	-	(1.7)	(6.2)	-	-	砂粒少量	良好	回転糸切後高台接合、底面ナデ		
18 - 10	05304P010	S1-2	第1層	土師器	甕	(20.2)	(15.9)	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	砂粒中量	良好	良好	
18 - 11	05304P011	S1-2 Pit3	第1層	土師器	甕	(22.6)	(7.7)	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	砂粒少量	良好	良好	
19 - 1	05304P012	S1-3	第3層、カマド第2層	須恵器	甕	(2.1)	(8.8)	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	砂粒少量	良好	良好	
19 - 2	05304P013	S1-3	覆土	土師器	甕	(12.2)	(6.0)	-	-	-	-	砂粒少量	良好	良好	
19 - 3	05304P014	S1-3	カマド第2層、カマド覆土	土師器	甕	(21.5)	(27.8)	-	-	ヘラナデ、輪積痕	ヘラナデ	砂粒少量	良好	良好	
19 - 4	05304P015	S1-3	カマド覆土	土師器	甕	(16.6)	(9.3)	-	-	ヘラナデ、輪積痕	ヘラナデ	砂粒中量	良好	良好	
19 - 5	05304P016	S1-3	カマド第2層、カマド覆土	土師器	甕	(21.8)	(18.1)	-	-	ヘラナデ、輪積痕	ヘラナデ	砂粒少量	良好	煤状炭化物付着	
19 - 6	05304P017	S1-3	覆土、カマド第2層、カマド覆土	土師器	甕	(23.0)	(19.6)	-	-	ヘラナデ、ヘラケズリ	ヘラナデ	砂粒少量	良好	良好	
19 - 7	05304P018	S1-3	カマド第2層	土師器	甕	-	(11.6)	(8.4)	-	-	タタキ目	-	砂底	良好	良好
20 - 1	05304P019	S1-4	覆土	須恵器	甕	-	-	-	-	-	-	砂粒少量	良好	良好	
20 - 2	05304P020	S1-4	第2層	土師器	甕	(12.4)	(5.4)	-	-	ヘラミガキ	ヘラナデ	砂粒少量	良好	内面黒色処理	
20 - 3	05304P021	S1-4	カマド	土師器	甕	(11.2)	(4.7)	-	-	ヘラミガキ	ヘラナデ	砂粒少量	良好	内面黒色処理	
20 - 4	05304P022	S1-4	カマド覆土	土師器	甕	(12.2)	(3.4)	-	-	ヘラミガキ	ヘラナデ	砂粒少量	良好	内面黒色処理	
20 - 5	05304P023	S1-4	カマド床面	土師器	甕	(12.4)	(3.0)	-	-	ヘラミガキ	ヘラナデ	砂粒少量	良好	内面黒色処理	
20 - 6	05304P024	S1-4	カマド第1層	土師器	甕	(15.8)	(8.5)	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	砂粒多量	良好	煤状炭化物付着	
20 - 7	05304P025	S1-4	貼床	土師器	甕	(23.0)	(5.9)	-	-	ヘラナデ、指頭圧痕、輪積痕	ヘラナデ	砂粒少量	良好	良好	
20 - 8	05304P026	S1-4	第1層、カマド覆土	土師器	甕	(22.8)	(15.2)	-	-	ヘラナデ、輪積痕	ヘラナデ	砂粒中量	良好	煤状炭化物付着	
20 - 9	05304P027	S1-4	カマド床面、カマド覆土	土師器	甕	(20.0)	(18.4)	-	-	ヘラナデ、輪積痕、指頭痕	ヘラナデ	砂粒中量	良好	良好	
20 - 10	05304P028	S1-5	第2層	須恵器	甕	(15.0)	(3.7)	-	-	口クロナデ	口クロナデ	砂粒少量	良好	良好	
20 - 11	05304P029	S1-5	第3層、第1層	須恵器	甕	-	(5.5)	(11.0)	-	-	タタキ目	-	砂粒少量	良好	
20 - 12	05304P030	S1-5	第1層	須恵器	甕	-	-	-	-	-	-	砂粒少量	良好	良好	
20 - 13	05304P031	S1-5	第2層	須恵器	甕	-	-	-	-	-	-	砂粒少量	良好	内面黒色処理、底面火タヌキ痕、粘土紐付着	
20 - 14	05304P032	S1-5	第3層	須恵器	甕	-	(5.3)	(3.9)	-	-	ヘラミガキ	ヘラナデ	砂粒少量	良好	内面黒色処理
20 - 15	05304P033	S1-5	第1層、Ph4覆土	須恵器	甕	(13.0)	(4.9)	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	砂粒中量	良好	火タヌキ痕	
20 - 16	05304P034	S1-5	第2層	須恵器	甕	(11.8)	(4.4)	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	砂粒少量	良好	良好	
20 - 17	05304P035	S1-5	Ph4第2層	須恵器	甕	(16.6)	(10.3)	-	-	ヘラナデ、輪積痕	ヘラナデ	砂粒少量	良好	良好	
21 - 1	05304P036	S1-6	床面	須恵器	甕	(7.5)	-	-	-	口クロナデ	ヘラケズリ	砂粒少量	良好	墨書き土器(十萬)	
21 - 2	05304P037	S1-6	覆土	須恵器	甕	-	(17.1)	-	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	砂粒少量	良好	火タヌキ痕
21 - 3	05304P038	S1-6	第1層	須恵器	甕	-	-	-	-	口クロナデ	-	砂粒少量	良好	良好	
21 - 4	05304P039	S1-6	第1層	須恵器	甕	-	-	-	-	口クロナデ	ヘラナデ	砂粒少量	良好	良好	
21 - 5	05304P040	S1-6	Pit14覆土	須恵器	甕	-	-	-	-	ヘラミガキ	ヘラナデ	砂粒少量	良好	内面黒色処理	
21 - 6	05304P041	S1-6	床面	土師器	壺	(13.0)	(5.3)	-	-	-	-	砂粒少量	良好	内面黒色処理	
21 - 7	05304P042	S1-6	第2層	土師器	壺	(13.6)	(3.4)	-	-	-	-	砂粒少量	良好	内面黒色処理	
21 - 8	05304P043	S1-6	第2層	土師器	壺	(15.0)	(3.6)	-	-	-	-	砂粒少量	良好	内面黒色処理	
21 - 9	05304P044	S1-6	Pit6覆土	土師器	壺	12.4	4.7	4.6	-	ヘラナデ	ヘラナデ	砂粒少量	良好	内面黒色処理	
21 - 10	05304P045	S1-6	覆土	土師器	甕	(10.0)	(8.5)	-	-	ヘラミガキ	ヘラナデ	砂粒少量	良好	良好	
21 - 11	05304P046	S1-6	カマド覆土	土師器	甕	(21.2)	(10.0)	-	-	ヘラナデ、指頭圧痕	ヘラナデ	砂粒少量	良好	良好	
21 - 12	05304P047	S1-6	第2層	土師器	甕	(16.8)	(6.7)	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	砂粒少量	良好	良好	
21 - 13	05304P048	S1-6	第2層	土師器	甕	(22.0)	(6.5)	-	-	ヘラナデ、輪積痕	ヘラナデ	砂粒中量	良好	良好	
21 - 14	05304P049	S1-6	第2層	土師器	甕	(14.2)	(6.6)	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	砂粒少量	良好	良好	

図版番号		整理番号		出土地点		層位		種別		器種		口径 cm		器高 cm		底径 cm		外面調整		底面調整		胎土		焼成	
22 - 1	05304P050	S16	カマド覆土	土師器	甕	(17.8)	(7.7)	-	-	ヘラナデ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	良好	
22 - 2	05304P051	S16	カマド覆土	土師器	甕	(12.0)	(15.3)	(6.4)	ヘラナデ、ヘラクスリ、指頭圧痕	ヘラナデ	ナデ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	良好	
22 - 3	05304P052	S16	カマド覆土	土師器	甕	(18.6)	(12.5)	-	-	ヘラナデ、指頭圧痕	ヘラナデ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	良好	
22 - 4	05304P053	S16	Pit1 覆土	土師器	甕	(15.2)	(8.8)	-	-	ヘラナデ、指頭圧痕	ヘラナデ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	良好	
22 - 5	05304P054	S16	Pit3 覆土	土師器	甕	(18.6)	(18.0)	-	-	ヘラナデ、輪積痕	ヘラナデ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	良好	
22 - 6	05304P055	S16	第3層、第2層、カマド煙道覆土	土師器	甕	(22.8)	(19.2)	-	-	ヘラナデ、輪積痕、指頭圧痕	ヘラナデ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	良好	
22 - 7	05304P056	S16	Pit4 覆土	土師器	甕	(21.5)	(10.3)	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	良好	
22 - 8	05304P057	S16	カマド覆土	土師器	甕	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	良好	
23 - 1	05304P059	S17	床面、覆土	土師器	甕	(16.0)	(3.9)	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	内面黒色處理	
23 - 2	05304P060	S17	Pit1 覆土	土師器	甕	(11.8)	(4.0)	-	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	内面黒色處理	
23 - 3	05304P061	S17	カマド覆土	土師器	甕	(11.8)	(4.6)	(4.2)	-	ヘラミガキ	ヘラミガキ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	良好	
23 - 4	05304P062	S17	覆土	土師器	甕	(14.4)	(7.2)	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	煤状炭化物付着	
23 - 5	05304P063	S17	第1層、Pit1 覆土	土師器	甕	(27.0)	(16.5)	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	煤状炭化物付着	
23 - 6	05304P064	S17	第1層	土師器	甕	(20.1)	(3.7)	11.2	-	ヘラナデ、輪積痕	ヘラナデ、輪積痕	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	良好	
23 - 7	05304P065	S17	床面、カマド覆土	土師器	甕	-	(16.2)	-	-	ヘラナデ	ヘラナデ	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	良好	

第4表 遺構内出土石器計測表(堅穴住居跡)

図版番号		整理番号		出土地点		層位		最大計測値 (mm, g)		石質		器種		長さ 帯		厚さ		重量		最大計測値 (mm, g)		石質		器種	
24 - 1	05304S001	S1	覆土	土師器	甕	62.7	50.4	13.7	31.9	珪質頁岩	不定形	複合	複合	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	備考
24 - 2	05304S002	S1-4	Pit1 覆土	土師器	甕	38.5	35.8	8.6	9.3	珪質頁岩	不定形	複合	複合	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	備考
24 - 3	05304S003	S1	第1層	土師器	甕	87.0	37.0	36.0	13.40	珪質頁岩	敲撃器	敲撃器	敲撃器	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	備考
24 - 4	05304S004	S1-2	第1層	土師器	甕	87.0	67.0	40.0	29.20	珪質頁岩	敲撃器	敲撃器	敲撃器	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	備考
24 - 5	05304S005	S1-3	カマド第2層	土師器	甕	138.9	62.0	75.0	47.40	溶結凝灰岩	砥石	砥石	砥石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	備考
24 - 6	05304S006	S1-3	カマド第3層	土師器	甕	144.0	105.0	50.0	46.0	安山岩	敲撃器	敲撃器	敲撃器	擦り	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛冶溝
24 - 7	05304S007	S1-3	カマド第2層	土師器	甕	169.5	117.5	42.0	125.80	安山岩	台石・石皿	複合	複合	複合	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	炉壁
24 - 8	05304S008	S1-5	第3層	土師器	甕	108.0	49.0	33.1	18.00	珪質頁岩	台石・石皿	複合	複合	複合	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛冶溝
24 - 9	05304S009	S1-7	カマド第4層	土師器	甕	310.0	79.5	54.0	385.50	安山岩	台石・石皿	砥石	砥石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛冶溝
24 - 10	05304S010	S1-7	第1層	土師器	甕	74.1	31.4	29.5	64.0	珪質頁岩	砥石	砥石	砥石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛冶溝
24 - 11	05304S011	S1-7	Pit5 第1層	土師器	甕	107.0	96.0	57.0	34.20	珪質頁岩	砥石	砥石	砥石	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	鍛冶溝

第5表 遺構内出土土製品観察表(堅穴住居跡)

図版番号		整理番号		出土地点		層位		最大計測値 (mm, g)		石質		器種		長さ 帯		厚さ		重量		最大計測値 (mm, g)		石質		器種	
25 - 1	05304C001	S1-3	カマド第2層	土師器	甕	17.0	15.5	12.0	1.9	燒成粘土塊	種別	備考	-	-	-	-	-	-	-	-	21.2	187	23	文様	備考
25 - 2	05304C002	S1-4	カマド覆土	土師器	甕	54.2	43.8	9.8	19.0	支脚	-	-	-	-	-	-	-	-	-	109	35	14	58	鏡先	
25 - 3	05304C003	S1-4	カマド第1層	土師器	甕	50.0	52.7	11.5	29.2	支脚	-	-	-	-	-	-	-	-	-	119	19	10	24	刀子	

第6表 遺構内出土石製品計測表(堅穴住居跡)

図版番号		整理番号		出土地点		層位		最大計測値 (mm, g)		石質		器種		長さ 帯		厚さ		重量		最大計測値 (mm, g)		石質		器種	
25 - 5	05304C005	S1-7	柱穴 P12	土師器	甕	56.4	33.8	11.1	12.6	珪質頁岩	部位	深鉢	深鉢	-	-	-	-	-	-	-	114.0	152.9	61.1	1006.0	安山岩
23 - 9	05304P067	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	119.1	82.9	34.8	412.0	凝灰岩	

第10表 遺構内出土土石器観察表(柱穴状ビット)

図版番号		整理番号		出土地点		層位		最大計測値 (mm, g)		石質		器種		長さ 帯		厚さ		重量		最大計測値 (mm, g)		石質		器種	
24 - 12	05304S012	S1-2	柱穴 P12	土師器	甕	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	複合(敲き・擦り)
24 - 13	05304S013	S1-3	柱穴 P13	土師器	甕	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	複合(敲き・擦り)

図版番号		整理番号		出土地点		層位		最大計測値 (mm, g)		石質		器種		長さ 帯		厚さ		重量		最大計測値 (mm, g)		石質		器種	
24 - 11	05304F010	S1-2	力マド第4層	土師器	甕	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	複合(敲き・擦り)
27 - 11	05304F011	S1-1	力マド第4層	土師器	甕	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	複合(敲き・擦り)
27 - 13	05304F013	S1-1	柱穴 P13	土師器	甕	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	複合(敲き・擦り)

図版番号		整理番号		出土	

第11表 遺構外出土土器観察表①

図版番号	整理番号	出土地点	層位	種別	器形	部位	文様	備考
26 - 8	05304P075	搅乱		縄文土器	深鉢	胴	腹部、LR(縦)	織維混入、前期未葉
26 - 9	05304P076	表探		縄文土器	深鉢	胴	底部、結束第一種(RL)(横)	織維混入、前期未葉
26 - 10	05304P077	表探		縄文土器	深鉢	胴	貼付隆帯(左押圧による刻目)、RL(横、縦)	中期中葉
26 - 11	05304P078	表探		縄文土器	深鉢	胴	貼付隆帯(左押圧による刻目)、LR(縦)	中期中葉
26 - 12	05304P079	D-1	第II層	縄文土器	深鉢	胴	腹部、LR(縦)	中期後半

第12表 遺構外出土土器観察表②

図版番号	整理番号	出土地点	層位	種別	器種	口径 cm	器高 cm	底径 cm	外面調整	内面調整	胎土	焼成	備考
26 - 1	05304P068	搅乱		土師器	杯	(12.2)	(4.8)	-	-	ヘラミガキ	-	良好	内面黒色處理
26 - 2	05304P069	表探		土師器	杯	-	5.9	(5.0)	-	-	-	良好	良好
26 - 3	05304P070	搅乱		土師器	甕	(13.8)	(5.0)	-	ヘラナデ	-	-	良好	良好
26 - 4	05304P071	表探		須恵器	甕	-	-	-	タタキ目	-	-	良好	良好
26 - 5	05304P072	須恵器		須恵器	甕	-	-	-	タタキ目	-	-	良好	砂粒少量
26 - 6	05304P073	搅乱		須恵器	甕	-	-	-	タタキ目	-	-	良好	砂粒少量
26 - 7	05304P074	J-13	第II層	須恵器	甕	-	-	-	タタキ目	-	-	良好	砂粒少量

第13表 遺構外出土石器計測表

図版番号	整理番号	出土地点	層位	最大計測値 (mm、g)	重量	石質	器種	備考
26 - 13	05304S014	表探		32.0	45.0	12.1	珪質頁岩	不定形
26 - 14	05304S015	表探		31.7	18.0	7.0	珪質頁岩	フレーベーク
26 - 15	05304S016	K-15	第III層	142.0	76.7	33.5	476.0	安山岩 敲打器

第14表 遺構外出土石製品観察表

図版番号	整理番号	出土地点	層位	最大計測値 (mm、g)	重量	石質	器種	備考
26 - 16	05304C006	表探		45.0	48.7	5.5	17.3	頁岩

第15表 遺構外出土鉄関連遺物計測表

図版番号	整理番号	出土地点	層位	最大計測値 (mm、g)	重量	長さ	幅	厚さ	重量	備別	備考
27 - 3	05404F003	搅乱		-	-	69	51	35	156	椀型鍛冶滓	
27 - 12	05304F012	搅乱		-	-	45	9	5	4	棒状鍛製品	
27 - 14	05304F014	搅乱		-	-	317	49	11	332	直刀	

ま　と　め

赤坂遺跡は、青森市大字戸山字赤坂に所在している。地形的には、西側を北流する赤川によって区切られる火山性の台地上に位置する。

当委員会では、分譲宅地の造成工事に先立ち、本遺跡の北側に相当する地点において調査面積 2,496 m²の発掘調査を実施した。調査区は全体として南東から北西に向かって下る緩やかな丘陵で、標高は 18 ~ 22m である。

調査の結果、竪穴住居跡 7 軒、土坑 9 基、溝状土坑 1 基、柱穴状ピット 8 基を検出した。また、主体である土師器、須恵器等の平安時代の土器のほか、縄文土器、石器、土製品、石製品、鉄関連遺物等、段ボール箱換算で 10 箱分の遺物が出土した。

竪穴住居跡は、調査区の東側で 7 軒を検出したが、調査区端に位置するものもあり全容を把握できたのは 3 軒に留まる。5 軒はカマドを確認しており、3 軒は東壁に、北壁と南壁は各 1 軒と差が見られた。

また、張り出し部を有するものが 2 軒あり、第 4 号竪穴住居跡についてはおおむね収蔵施設、第 5 号竪穴住居跡については、判然としないがおおむね出入り口部と考えられる。いずれの住居跡も出土遺物よりおおむね 10 世紀中葉～後半のものと思われるが、遺構間に接合関係の見られるものもあり、個々には若干の時期差があるものと思われる。

土坑は、出土遺物があまり見られず、時期が不明なものが多数であるが、第 2 号土坑は、フラスコ状、袋状を呈し、敲磨器が出土したこともあり、縄文時代のものと思われる。また、1 基検出した溝状土坑についても時期を特定できなかったが、その形態からは縄文時代の狩猟に係る遺構の可能性が考えられる。

柱穴状ピットについては、散発的な検出で、時期も特定できないことから、性格等を判断するには至らなかつたが、第 6 号竪穴住居跡付近では 4 基検出しており、建物の一部として関連する可能性も残る。

出土遺物には、平安時代の土師器、須恵器、縄文土器、石器、土製品、石製品、鉄関連遺物が見られる。縄文土器は、少数が破片で出土しているが、その中では縄文時代前期末葉と中期中葉が若干多い状況である。土師器については、おおむね 10 世紀中葉～後半のものと思われたほか、「十万」と文字が記された墨書き土器が 1 点出土している。石器は、時期の特定は困難であるが、第 2 号土坑から出土した敲磨器は、おおむね縄文時代、竪穴住居跡より出土した砥石などは平安時代と思われる。また、鉄関連遺物については、盛土からの出土であるが直刀や鍔先等の鉄製品のほか、羽口、鉄滓など、生産活動が想定される遺物の出土も見られた。特に第 7 号竪穴住居跡は、調査区端で、かつ調査区内への出入口である地点のため、かなり搅乱を受けていたが、他の住居跡より多数の鉄関連遺物の出土が見られた。

全体として、縄文時代と平安時代の遺構、遺物が見られる状況であったが、縄文時代では、溝状土坑の検出や、散発的な遺物の出土などから、おおむね狩猟場としての状況が、平安時代では、複数の竪穴住居跡の検出より、集落跡としての状況がそれぞれ考えられる。

今回確認した本遺跡の主体と思われる平安時代の集落は、さらに周囲に広がるものと思われる。基本層序の項でも述べたが、調査区の周囲は北東側から南東側にかけて宅地であり、広く削平を受けているが、調査区内での状況を見るかぎり、おおむね大谷火山灰が現れる地山面で削平が留まっており、竪穴住居跡等の遺構が残存する可能性は高いと思われる。また、南西側は公園緑地となっており、原地形を

保っているものと思われ、同じく遺構が残存する可能性は高いと思われる。西側については調査区から50m程で赤川に至るが、この間については地形の改変が著しく遺構等の残存する可能性は低い。なお北側については、道路を挟んだ中学校グラウンドまでが遺跡範囲となっており、原地形はグラウンドに向かって下る丘陵斜面で現在のグラウンドは盛土と思われ、遺構が残存する可能性も考えられる。

最後になりましたが、現地調査から整理、報告書刊行に至るまで、ご指導、ご協力を賜りました関係各位に深くお礼を申し上げます。

(担当者一同)

引用・参考文献

- 青森県 2001 『青森県史 自然編 地学』
- 青森県教育委員会 1986 第105集『山本遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1988 第111集『李平下安原遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1991 第134集『中野平遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1998 第243集『高屋敷館遺跡発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 1998 第244集『隠川(4)遺跡・隠川(12)遺跡I発掘調査報告書』
- 青森県教育委員会 2001 第303集『安田(2)遺跡』
- 青森市教育委員会 1965 『四ツ石遺跡調査概報』
- 青森市教育委員会 1967 『玉清水遺跡調査概報』
- 青森市教育委員会 1971 『玉清水Ⅲ遺跡発掘調査報告書』
- 青森市教育委員会 1994 第21集『市内遺跡詳細分布調査報告書』
- 青森市教育委員会 1995 第25集『市内遺跡詳細分布調査報告書』
- 青森市教育委員会 1996 第29集『市内遺跡詳細分布調査報告書』
- 青森市教育委員会 1997 第31集『市内遺跡詳細分布調査報告書』
- 青森市教育委員会 1997 第34集『葛野(2)遺跡発掘調査報告書』
- 青森市教育委員会 1998 第39集『市内遺跡詳細分布調査報告書』
- 青森市教育委員会 1999 第43集『市内遺跡発掘調査報告書』
- 青森市教育委員会 1999 第44集『葛野(2)遺跡発掘調査報告書II』
- 青森市教育委員会 2001 第54集『新町野遺跡発掘調査報告書II・野木遺跡発掘調査報告書II』
- 青森市教育委員会 2003 第65集『雲谷山吹(4)～(7)遺跡発掘調査報告書』
- 青森市教育委員会 2003 第67集『深沢(3)遺跡発掘調査報告書』
- 青森市教育委員会 2003 第69集『市内遺跡発掘調査報告書11』
- 青森市教育委員会 2004 第74集『市内遺跡発掘調査報告書12』
- 青森市教育委員会 2004 第75集『江渡遺跡発掘調査報告書』
- 青森市螢沢遺跡発掘調査団 1979 『螢沢遺跡』
- 葛西勵 1978 「青森市月見野遺跡発見の縄文後期の甕棺と人骨」『燃糸文』第7号
- 葛西勵・高橋潤・児玉大成 1996 「青森市沢山(1)遺跡の出土遺物」『燃糸文』第21号
- 工藤清泰 1998 「津軽平野の様相」『第24回古代城柵官衛遺跡検討会資料』古代城柵官衛遺跡検討会
- 桜井清彦・鈴木克彦・高橋龍三郎 1985 「青森市玉清水遺跡発掘調査概報」『月刊考古学ジャーナル』252
- 三浦圭介 1992 「青森県における古代の土器様相」『第18回古代城柵官衛遺跡検討会資料』古代城柵官衛遺跡検討会

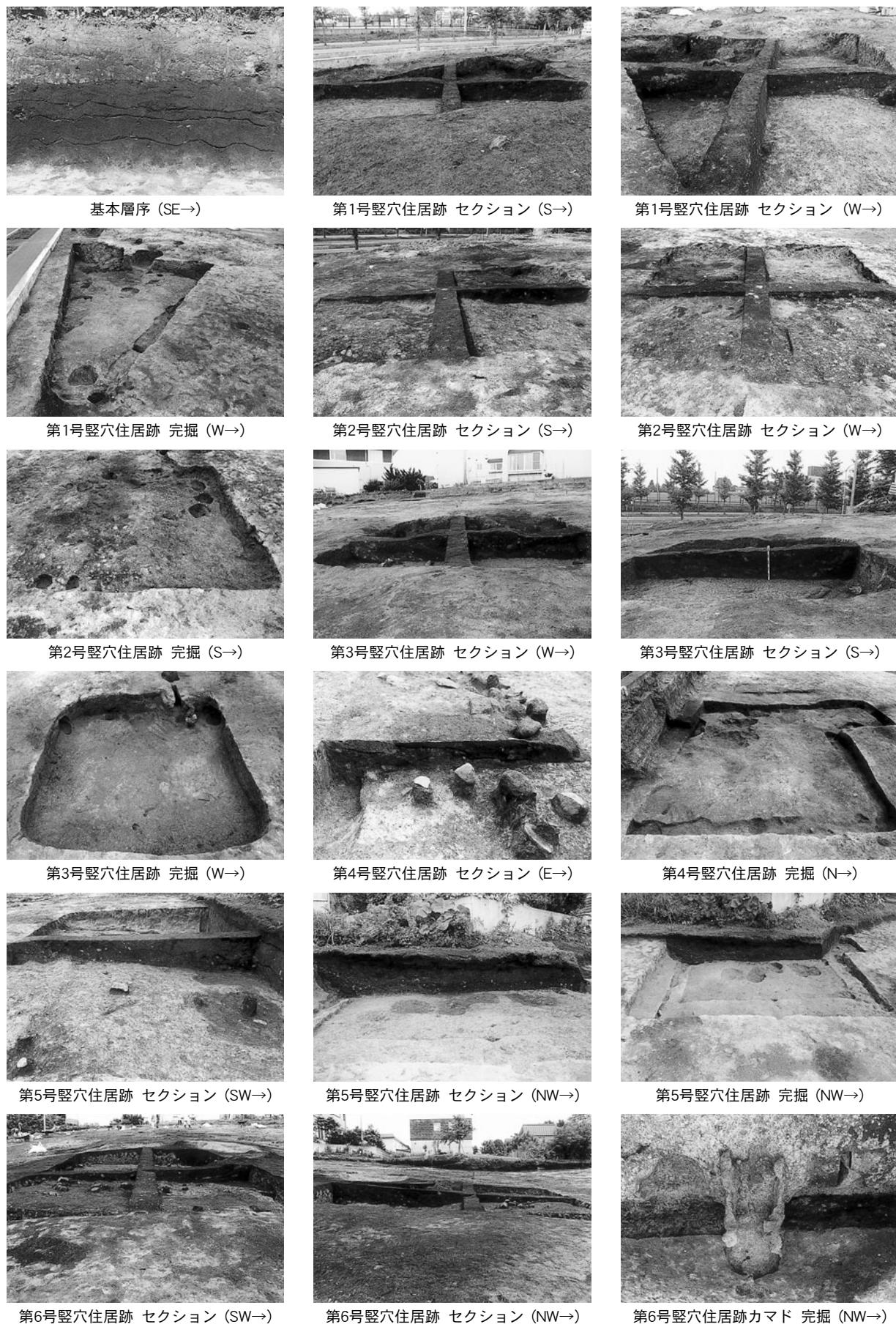


写真 1 検出遺構 (1)

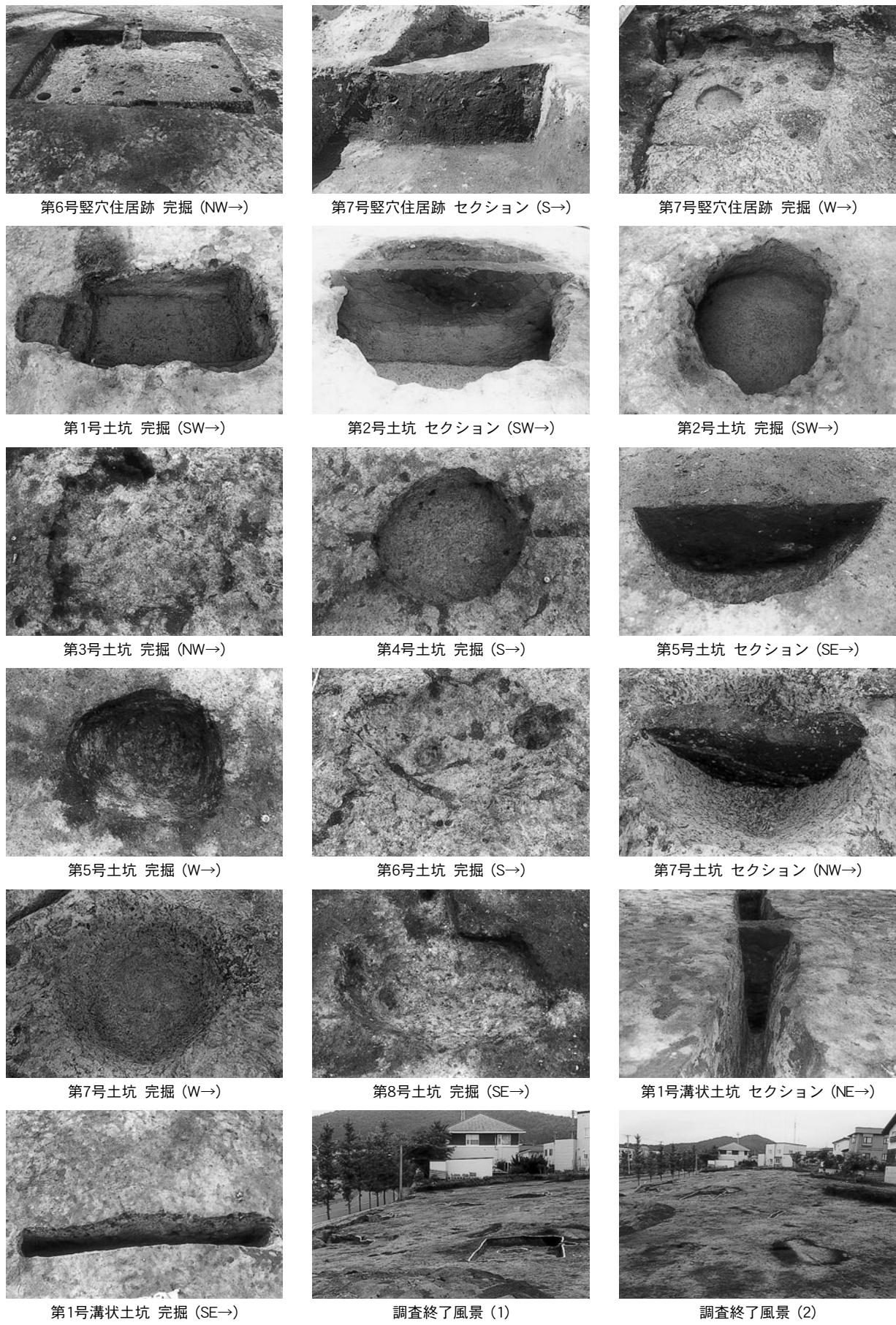


写真2 検出遺構 (2)

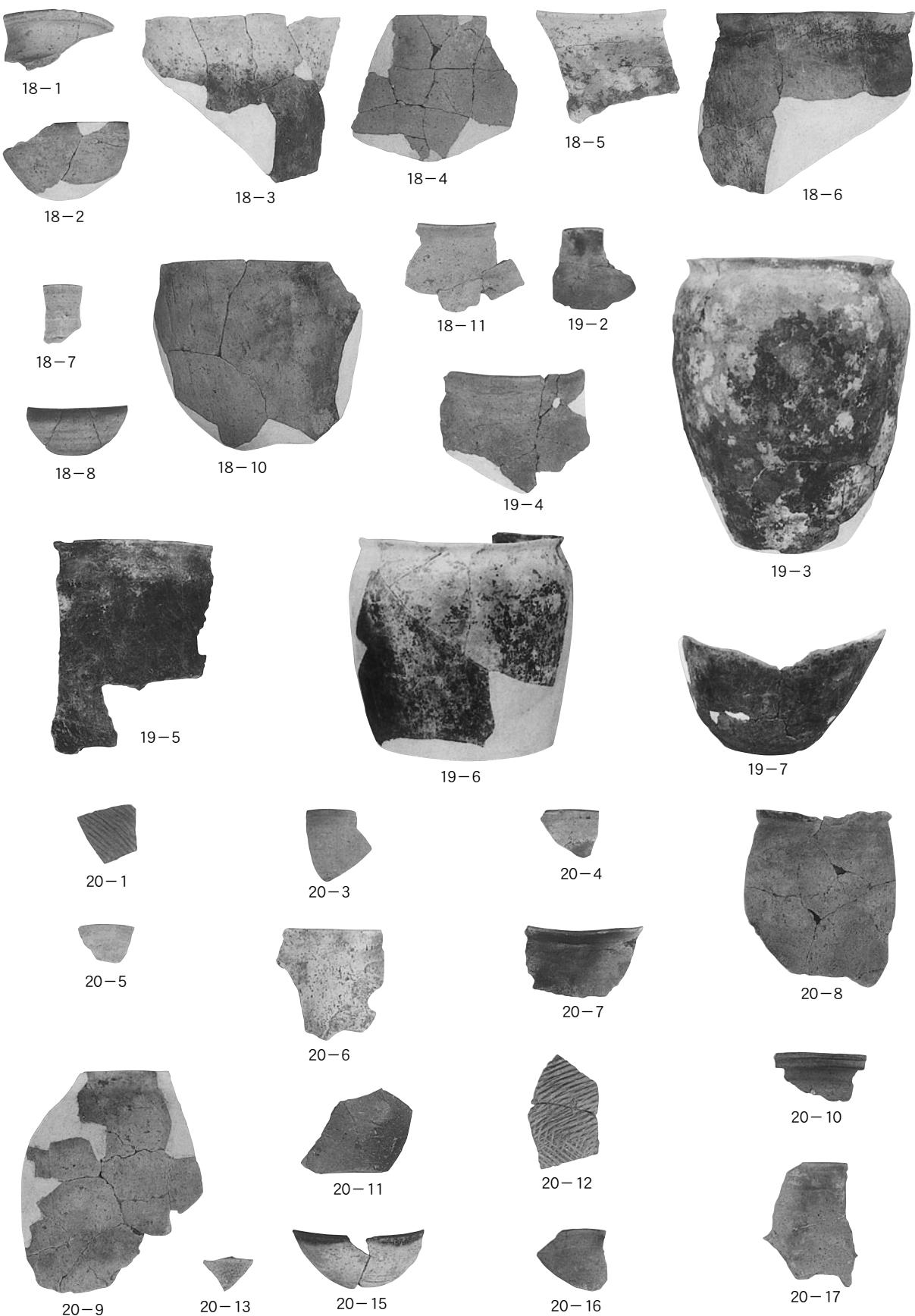


写真3 出土遺物(1)

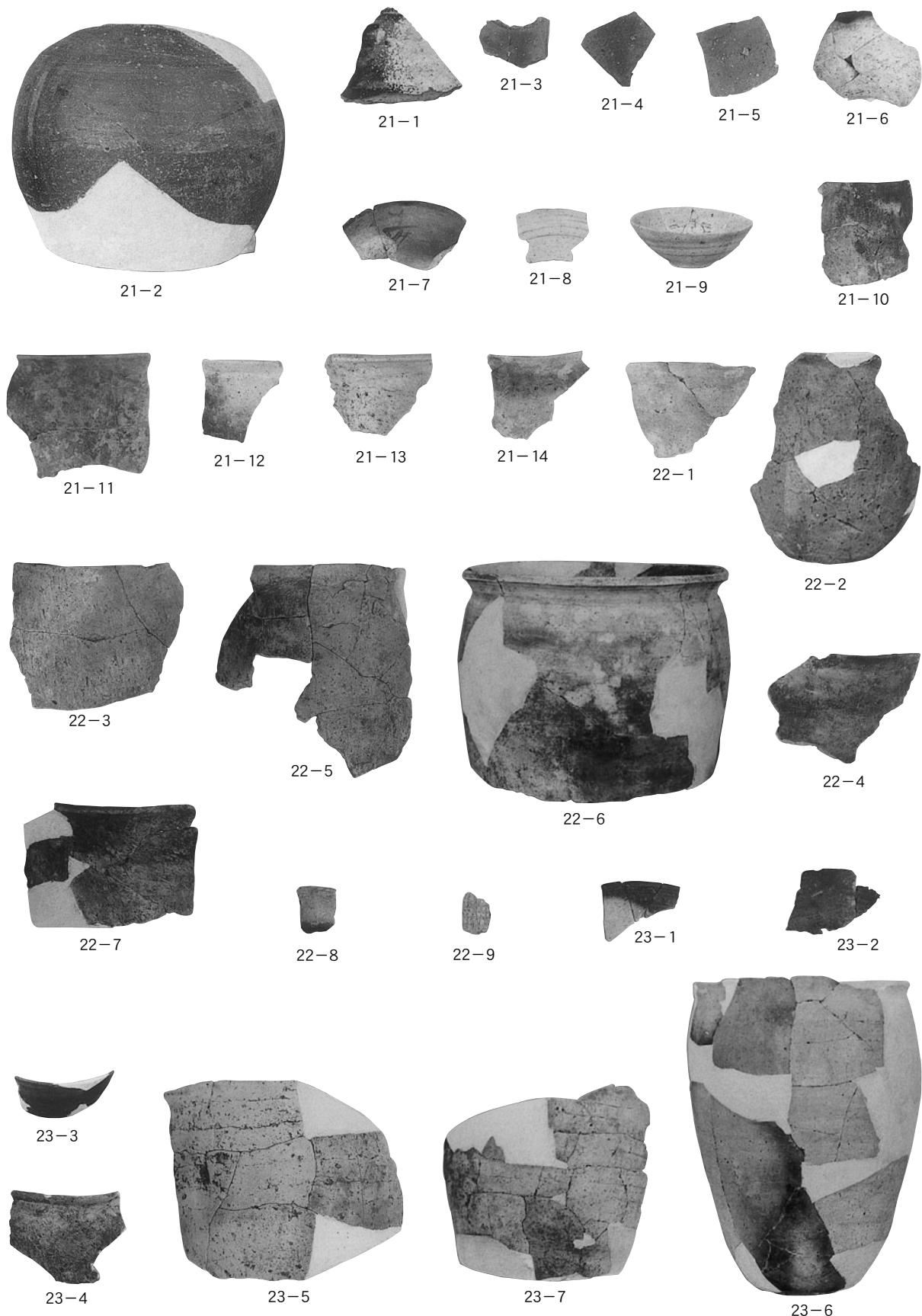


写真4 出土遺物(2)

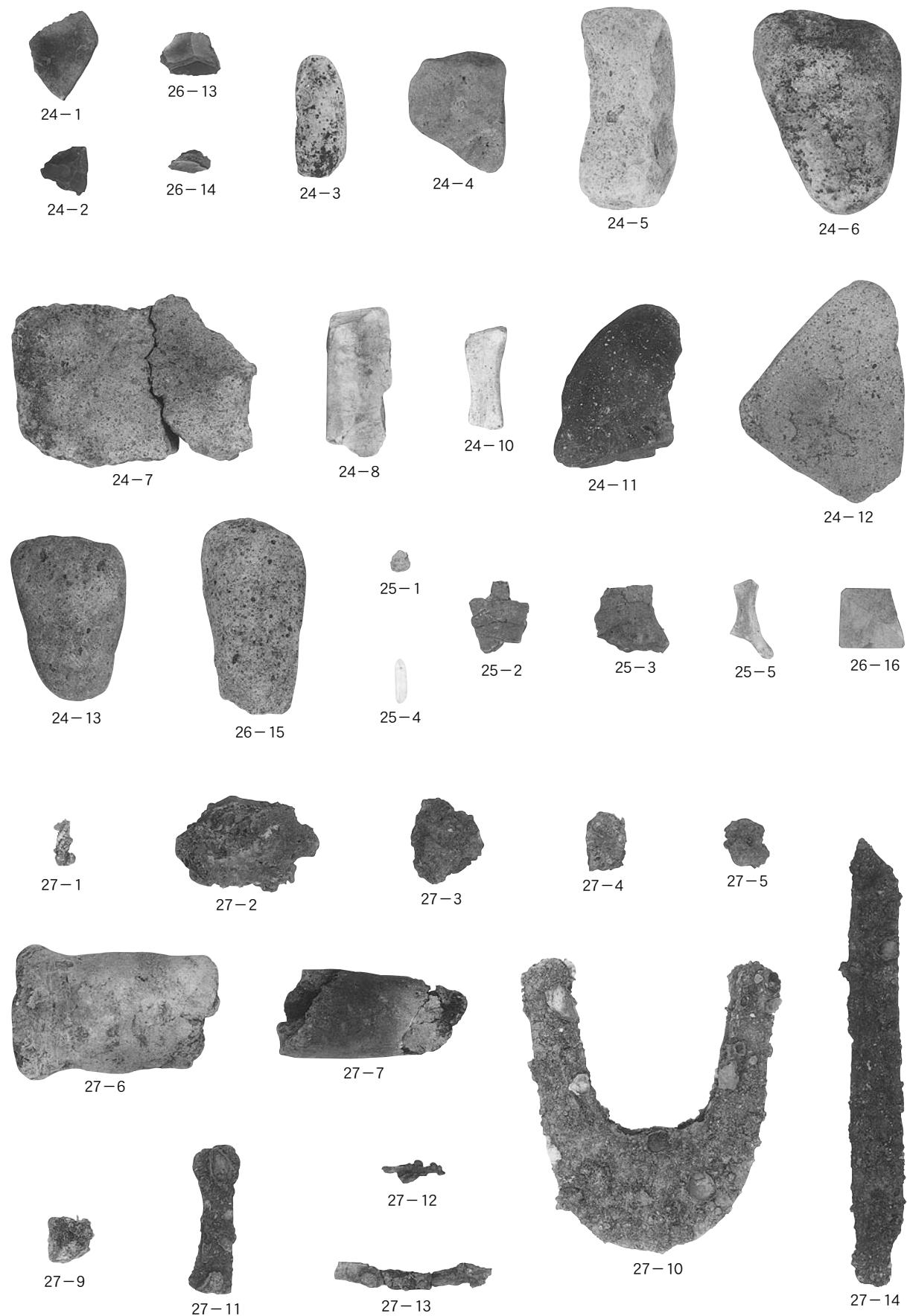


写真5 出土遺物(3)

報告書抄録

ふりがな	あかさかいせきはつくつちょうさほうこくしょ								
書名	赤坂遺跡発掘調査報告書								
副書名									
卷次									
シリーズ名	青森市埋蔵文化財調査報告書								
シリーズ番号	第77集								
編著者名	小野貴之、児玉大成、設楽政健								
編集機関	青森市教育委員会								
所在地	〒030-8555 青森県青森市中央一丁目22-5 TEL 017-734-1111								
発行年月日	西暦2005年3月8日								
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コ ー ド		世界測地系		調査期間	調査面積 m ²	調査原因	
市町村	遺跡番号	北 緯	東 經						
あか 赤	さか 坂	あおもり し おおあざ 青森市大字 と やま あざ あかさか 戸山字赤坂	02201	053	40° 48' 01"	140° 40' 49"	20040608 ～ 20040716	2,496	分譲宅地造成に伴う事前調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構			主な遺物	特記事項		
あか 赤	さか 坂	集落跡	縄 平	文 安	竪穴住居跡 土坑 溝状土坑 柱穴状ピット	7軒 9基 1基 8基	土師器 須恵器 縄文土器 石器 鉄関連遺物		

既刊埋蔵文化財関係報告書一覧

青森市の文化財	1	1962『三内盡園遺跡調査概報』	"	第41集	1998『野木遺跡発掘調査概報』
"	2	1965『四ツ石遺跡調査概報』	"	第42集	1998『熊沢遺跡発掘調査概報』
"	3	1967『玉清水遺跡調査概報』	"	第43集	1999『市内遺跡詳細分布調査報告書』
"	4	1970『三内丸山遺跡調査概報』	"	第44集	1999『葛野(2)遺跡発掘調査報告書II』
"	5	1971『野木と遺跡調査報告書』	"	第45集	1999『小牧野遺跡発掘調査報告書IV』
"	6	1971『玉清水III遺跡発掘調査報告書』	"	第46集	1999『新町野・野木遺跡発掘調査概報』
"	7	1971『大浦遺跡調査報告書』	"	第47集	1999『稲山遺跡発掘調査概報』
"	8	1973『孫内遺跡発掘調査報告書』	"	第48集	2000『熊沢遺跡発掘調査報告書』
		1979『螢沢遺跡』	"	第49集	2000『稲山遺跡発掘調査概報II』
		1983『四戸橋遺跡調査報告書』	"	第50集	2000『小牧野遺跡発掘調査報告書V』
青森市の埋蔵文化財	1983『山野峠遺跡』	"	第51集	2000『桜峯(1)・雲谷山吹(3)遺跡発掘調査報告書』	
"	1985『長森遺跡発掘調査報告書』	"	第52集	2000『大矢沢野田(1)遺跡調査報告書』	
"	1986『田茂木野遺跡発掘調査報告書』	"	第53集	2000『市内遺跡発掘調査報告書』	
"	1987『横内城跡発掘調査報告書』	"	第54集	2001『新町野遺跡発掘調査報告書II・野木遺跡発掘調査報告書II』	
"	1988『三内丸山I遺跡発掘調査報告書』	"	第55集	2001『小牧野遺跡発掘調査報告書VI』	
青森市埋蔵文化財調査報告書		"	第56集	2001『稲山遺跡発掘調査報告書I』	
"	第16集	1991『山吹(1)遺跡発掘調査報告書』	"	第57集	2001『稲山遺跡発掘調査概報III』
"	第17集	1992『埋蔵文化財出土遺物調査報告書』	"	第58集	2001『大矢沢野田(1)遺跡発掘調査概報II』
"	第18集	1993『三内丸山(2)遺跡発掘調査概報』	"	第59集	2001『市内遺跡発掘調査報告書』
"	第19集	1993『市内遺跡発掘調査報告書』	"	第60集	2002『小牧野遺跡発掘調査報告書VII』
"	第20集	1993『小牧野遺跡発掘調査概報』	"	第61集	2002『大矢沢野田(1)遺跡発掘調査報告書』
"	第21集	1994『市内遺跡詳細分布調査報告書』	"	第62集	2002『稲山遺跡発掘調査報告書II』
"	第22集	1994『小三内遺跡発掘調査報告書』	"	第63集	2002『稲山遺跡発掘調査概報IV』
"	第23集	1994『三内丸山(2)・小三内遺跡発掘調査報告書』	"	第64集	2002『市内遺跡発掘調査報告書』
"	第24集	1995『横内遺跡・横内(2)遺跡発掘調査報告書』	"	第65集	2003『雲谷山吹(4)～(7)遺跡発掘調査報告書』
"	第25集	1995『市内遺跡詳細分布調査報告書』	"	第66集	2003『稲山遺跡発掘調査報告書III』
"	第26集	1995『桜峯(2)遺跡発掘調査報告書』	"	第67集	2003『深沢(3)遺跡発掘調査報告書』
"	第27集	1996『桜峯(1)遺跡発掘調査概報』	"	第68集	2003『近野遺跡発掘調査報告書』
"	第28集	1996『三内丸山(2)遺跡発掘調査報告書』	"	第69集	2003『市内遺跡発掘調査報告書11』
"	第29集	1996『市内遺跡詳細分布調査報告書』	"	第70集	2003『小牧野遺跡発掘調査報告書VII』
"	第30集	1996『小牧野遺跡発掘調査報告書』	"	第71集	2004『稲山遺跡発掘調査報告書IV』
"	第31集	1997『市内遺跡詳細分布調査報告書』	"	第72集	2004『稲山遺跡発掘調査報告書V』
"	第32集	1997『桜峯(1)遺跡発掘調査概報II』	"	第73集	2004『新町野遺跡発掘調査概報』
"	第33集	1997『新町野遺跡試掘調査報告書』	"	第74集	2004『市内遺跡発掘調査報告書12』
"	第34集	1997『葛野(2)遺跡発掘調査報告書』	"	第75集	2004『江渡遺跡発掘調査報告書』
"	第35集	1997『小牧野遺跡発掘調査報告書II』	"	第76集	2005『栗山(3)遺跡発掘調査報告書』
"	第36集	1998『桜峯(1)遺跡発掘調査報告書』	"	第77集	2005『赤坂遺跡発掘調査報告書』
"	第37集	1998『新町野遺跡発掘調査報告書』	"	第78集	2005『三内丸山(8)遺跡発掘調査報告書』
"	第38集	1998『野木遺跡発掘調査報告書』	"	第79集	2005『市内遺跡発掘調査報告書13』
"	第39集	1998『市内遺跡詳細分布調査報告書』	"	第80集	2005『合子沢松森(2)遺跡発掘調査概報』
"	第40集	1998『小牧野遺跡発掘調査報告書III』	"	第81集	2005『石江遺跡群発掘調査概報』

青森市埋蔵文化財調査報告書 第77集

赤坂遺跡発掘調査報告書

発行年月日 平成17年3月8日

発 行 青森市教育委員会

〒030-8555 青森市中央一丁目22-5

TEL 017-734-1111

印 刷 株式会社サンエイ

〒030-0121 青森市妙見三丁目2-19

TEL 017-738-0040